
極東の天災の魔王

三毛猫ヤマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極東の天災の魔王

【Nコード】

N0407N

【作者名】

三毛猫ヤマト

【あらすじ】

これは、草薙護堂よりも前に神を殺し七人目のカンピオーネとなった者の物語である。

作者はこれが処女作です。至らない点多々あると思いますがよろしく願います。

序章（前書き）

作者は初心者で文才もありませんし、神さまに付いても原作の様に成り立ち等に付いて深くまで書くことが出来ません。それでも良いと言っ方はどうぞ

序章

カンピオーネ、それは神殺しの称号

カンピオーネ、それは篡奪者の称号

カンピオーネ、それは魔術師の王たる存在

カンピオーネ、それは神を神たらしめる権能を振りかざす者

カンピオーネ、それは人には決して倒すことが出来ない神を倒した
奇跡の体現者

そして二十一世紀初頭、エジプトで新たな魔王が誕生した。

【二十一世紀初頭、新たにカンピオーネと確認された日本人についての報告書より抜粋】

ギリシャ神話における最大最強の怪物テュポーンとは、同じギリシヤ神話の最高神ゼウスを倒す為に作り出された怪物で、

一度はその本願たるゼウスを倒す事に成功しますが、後に仲間の神々によって助け出されたゼウスによって山の下敷きにされてしまったと言っています。

その山こそが、現在のシチリア島のエトナ火山であり、今も山の下で雷や炎を放って噴火や地震を起こしていると言われるタイフーンの語源ともなった存在で、

まさに天災を神格化した神と言えます。

西条将征とは、この天災の怪物を殺害し、カンピオーネとなった少年なのです。

【グリニッジの賢人議会により作成された、西条将征についての報告書より抜粋】

西条将征がテュポーンから篡奪した権能『天災の化身』は、その名

の通り天災を具現化したような能力であり、更に最近では「光り輝く剣を所持していた」と言う目撃証言も寄せられており、このことから彼は既に他にも複数の神々を殺害し、複数の権能を所持している可能性もあり、その力は先達のカンピオーネたちが所有するような絶対的権威にもひけ劣ることはない。

尚、西条将征は当時も現在も魔術・呪術の知識は一切持たない。

これは、カンピオーネが魔術師の上位存在なのではなく、カンピオーネと魔術師はあくまで似て非なる存在だという証明になるかもしれない……

序章（後書き）

三毛猫ヤマトです。

前書き等に書いた様にド素人で文才もありませんし、携帯からの投稿で文章も短く、高校が今年卒業なので更新もかなりの遅いと思いますが、がんばって書いていきますのでよろしくお願いします。

詳細設定（前書き）

本編の前に設定を投稿します。

詳細設定

西条将征

身長：178cm

誕生日：4月13日

年齢：本編開始時16歳（高校一年）

原作開始時17歳（高校二年）

クラス：魔王

権能

本編開始時は二つ

原作開始時に四つ

テュポーン：『天災の化身』

ギリシヤ神話に登場する最大の怪物テュポーンから篡奪した権能、奪ったのはテュポーンの天災としての神格の内、その姿の元である火山の神格で自身の姿をテュポーンの姿に変え本体からは炎と雷を放ち火山弾を降らせることが出来る

フェルグス：『光の聖剣』

アルスターの英雄フェルグスから篡奪した権能、フェルグスが所有していた魔剣カラドボルグを使用する権能で、その内容は光で構成された剣を造り出すこと、刀身は最大一キロまで伸び、その伸縮の速さは光で構成されていることもあって文字通り光速の速さであるマルドウク：『大戦武装』

現在確認されている中で最古の神話であるメソポタミア神話の最高神マルドウクから篡奪した権能、マルドウクが地母神にして始祖竜ティアマトを倒した時にマルドウクが装備していたと言う四つの風と雷、四頭の荒馬に引きいられた嵐の戦車を召還し使役する容姿：奪還屋のデルカイザー似

備考

家は古流武術の道場で幼少の頃から祖父に鍛えられており、

中学二年の春の大会で空手の全国大会ベスト4

秋の大会で全国優勝を果たす。

空手をやってはいたが大元は祖父の古流武術なので体の運び等は古流武術より武術の内容に剣術もあり剣術も扱える

小さい頃からの祖父の教えを受け『武術とは弱いモノや力のないモノを守るためのモノ』と言う信念を元になっている。

故にカンピオーネになってからも助けを請われれば助けると言うスタンスから

大半の魔術師からはプルートと同じ民草に優しい珍しい王と言う印象を持たれている。

中学三年になる前の春休みにエジプト旅行へ行きそこで、テュポーンを殺しカンピオーネとなる

中学三年の秋にトルコの黒海沿岸部で一柱を倒すが

その際、近所？のヴォバン侯爵と遭遇し小競り合いになる

セフィリア・アークス

身長：170cm

誕生日：1月1日

年齢：本編開始時15歳（高校一年）

原作開始時16歳（高校二年）

クラス：騎士

武装：クライスト

容姿：黒猫のセフィリア・アークスを若くした感じ
備考

ヒロインその1

イタリアに起源をもち現在はドイツに本部を持つ秘密結社クロノスの幹部候補

エジプトで将征の神殺しに立ち会い将征の信念の触れて、彼に忠誠を誓い第一の騎士となる

（エリカの様な愛人ではない）

その後、ドイツ本国へ戻り結社に将征の騎士となったことを伝え
高校入学に合わせ日本の将征の学校へ留学し将征と側近として行動
を共にしている。

ナイザー・ブラツカイマー

身長：184.5cm

誕生日：10月5日

年齢：本編開始時24歳

原作開始時25歳

クラス：騎士

武装：ディオスクロイ

容姿：黒猫のナイザーその物

備考

本編開始前にジェノスと共に将征の騎士になった

クロノスの上位に入る騎士で普段はヨーロッパで神などに関する情
報収集を行っている。

他にも将征の他の結社や王等への特使役

ジェノス・ハザード

身長：179cm

誕生日：7月7日

年齢：本編開始時22歳

原作開始時22歳

クラス：騎士

武装：エクセリオン

容姿：黒猫のジェノスその物

備考

ナイザーと共に将征の騎士となる。

普段はナイザーと共に情報収集と将征への連絡や現地での案内係で

ヨーロッパと日本を往復している

ベルゼー・ロシュフォール

身長：192cm

誕生日：9月2日

年齢：本編開始時35

原作開始時35

クラス：騎士

武装：グングニル

容姿：黒猫のベルゼーその物

備考

クロノスの騎士の中でも最強と呼ばれる騎士の一人でその突きは魔術等による身体強化等を一切使わずに衝撃波を生み出す程
現在はクロノスのイタリア支部の支部長としてイタリア支部本部に
居る

シロネコ

種族：ネコ？

身長：不明

誕生日：不明

年齢：不明

備考

あらゆる国のあらゆる場所に、突如出現する白ネコ。

その正体は、どこかの国のスパイロボットともネコの着ぐるみを来た宇宙生命体とも噂されているが真偽は不明である

詳細設定（後書き）

三毛猫ヤマトです。

黒猫のキャラの登場に付いては、まずヒロインをどうするか考えているなかで、

将征サイドには、護堂よりも先にカンピオーネになったことで日本組の二人は将征の所へ来ると思うのでそのまま二人を入れて

護堂サイドにはヨーロッパ組の二人を入れて、日本からはひかりを入れちゃえと思ったので、

将征サイドにもヨーロッパ組を入れないとバランスが悪い気がしてオリキャラを考えたのですが、良いキャラと設定が思い付かず、

結局、ドチラも使えそうなセフィリアさんにヒロインとして登場して貰いました。

他の二人はジェノスは時々出るかも知れませんが、ナイザーは作者の技量不足で電話での会話や名前だけと言うことにもなるかもしれません。

オリハルコンについては、あんな希少な物を出したらすぐにどこかの王様に徴収されそうなので止めました。

内定や設定で矛盾等があるかも知れませんが、その辺は大目に見てくださると幸いです。

m (— —) m

第一章 魔王と神と三騎士と（前書き）

短くて申し訳ありませんが
どうぞ

第一章 魔王と神と三騎士と

秋の夜、

そう離れてはいない場所にチグリス川が流れている湖

夏には避暑地として少なからず子供連れの親子やカップルが集まり
そんな場所である。

そんな場所が今や変わり果てた姿へ成り果てていた

湖の回りには大小様々な穴や亀裂が走り、ソコへ水が流れ込み、空
から差し込む月の光がその惨状を照らし出す

既に元の姿をうかがい知ることが出来ないような有り様の湖、

そんな局地災害が起こったかのような場所で佇むのは二つの人影

一人は地面に腰を落とし災害により持ち上がった岩盤に背を預けて
いる

もう一人はその人影を見下ろす様に立つちその右手には光り輝く剣
が握られていた

ドチラも疲弊仕切っているのか息は荒く、立って居る方も立って居
るのがやつとと言う雰囲気である

？「ハア…ハア…ハア…、こここまでだぜ、神さま」

？「ハア…ハア…ハア…、まさかこの我が敗れようとはな」

地面に座り込んでいる人影の方が憎々しげに呟く

？「そりゃ負けるわけにはいかないからな」

もう片方は疲弊しながらも鋭い目で、そう返した。

？「フツ、今回は敗けを認めよう。我が宿敵よ、誇るが良い我と言
う世界最古の『鋼』の英雄にして神々の王を破ったこと」もう一人
は、ソレを鼻で笑いながらも相手を賞賛する

？「……ああ、武人としてあんたと闘えたことを誇りに思うよ」

？「最後に訊かせて貰おうか宿敵よ、我を破った神殺しの名を」

？「……、西条将征、」

名を訊き、その相手に対して凄惨な笑みを溢しながらその者は言う

？「しかと覚えたぞ、西条将征、お前を倒すのは我だ、次に会うときには此度の雪辱必ずや晴らしてくる。その命それまで預けておくぞ。」

声を発していた者の身体は徐々に塵の様に崩れ去っていく

将征「出来ればもう現れないで欲しいんだが、もしそんな時が来たならその時も勝たせて貰うさ、絶対に」

その手に握った光り輝く剣を相手に向けながら答える声には、確固たる鋼の意思が宿っていた

その顔はまだ幼さが残る少年のモノだったが、少年が纏う覇気は間違いない王者たる、覇者たる者が持つモノだった

？「その時を楽しみにしているぞ、我が宿敵たる神殺しの魔王、西条将征」

その言葉を最後に岩盤に背を預けて居たものは完全に塵となって崩れ去った

神々の王が去った後、湖に残ったのは少年一人、その手に握られていた光り剣もいつの間にか消え、その体は力尽きたのか、地面に向けて倒れ込もうとしていた

だが、その少年が地面に倒れ伏す事はなく、木々の間から飛び出して来た少女によってその体を支えられる

将征「セフィリアか…？」

セフィリア「はい、お疲れ様です。我が王よ」

飛び出して来た少女は支える少年とそう年は変わらないようにみえるが、

そのプラチナブロンドの髪を靡かせた青い瞳の少女は、美しい顔立ちと物静かな雰囲気から大人びた印象を受ける

将征「今何時？」

セフィリア「ちょうど日本時間で2時を回ったところです」

将征「今から向かって朝のホームルームに間に合うかな？」

セフィリア「フツ、大丈夫ですよ、近くに結社のヘリが来ていま

すし、空港にも、専用機を準備させていますから」

セフィリアは自身の主たる者の生真面目さに微笑を浮かべる

将征「そっか、悪いないつも」

セフィリア「いいえ、貴方は王なのです。我々民草を神と言う存在から守って下さる我らの主」

セフィリア「そんな貴方の望みを叶えるのが我らの役目なのですから、どうか気にしないでください」

将征「ハハッ、別に俺は王だからとか言う理由で闘ってる訳じゃないぜ、自分の信念の徹しているだけだ」

セフィリア「分かっています。だからこそ私は貴方に忠誠を誓ったのですから」

将征「フウ、そうだったな、」

大きな溜め息を吐きやれやれと言った様に肩をすくめる

将征「悪いけどこの後のこと任せても良いか？俺もそろそろ限界みたいだ」

セフィリア「ええ勿論です。ゆっくりとお休みください。その間に飛行機で日本へ向かいますのでご心配はありませんよ。」

将征の問いに笑みを持って答えるセフィリア

それを聞いて安心したのか、将征はセフィリアに身体を預けながら眠りにつく

将征が眠りについた後暫くしてから、セフィリアと同じように木々の間から二人の男が現れる

セフィリア「どうですか？我らの王は」

まるで自分のお気に入りのお玩具を自慢するかのように満面の笑みを浮かべながら

セフィリアは二人の男へ問う

？「俺たち一介騎士に王の批評など畏れ多いことだと思っただがな」
二人の内スキンヘッドの男の方は煙草の煙を吐き出しながらそう答える

？「俺は気に入ったぜ、この王様になら組織の命令とか関係なしに忠誠を誓っても良いと思っただね」

そう答えたのは、深い緑色の髪の毛のいかにも優男といった風情の男セフィリア「フツ、そうですか」

その答えに満足したのかセフィリアは優しく笑う

セフィリア「さてジェノス、我らの王をへりまで運んで貰えますか？我らの王は真面目な方なので学業も疎かにはしたくないそうですから」

セフィリアは楽しそうに言う

ジェノス「ハイハイ、了解しましたよ」

それに快活に答え、セフィリアから将征を受け取る深い緑色の髪の毛の優男、ジェノス

？「俺はこの後始末をやっていくから、お前たちは王を空港までお連れしてくれ」

セフィリア「分かりました。後始末を任せてすみません、ナイザー」
ナイザー「気にするな、コレも王に仕える騎士の務めだ」

セフィリアの言葉にスキンヘッドの男、ナイザーが答える

ジェノス「じゃあ後は任せただ、ナイザー」

ジェノスの言葉に背を向け煙草吹かして歩きながら手のひらを振る、ナイザー

速く行けと言うことだろう

セフィリア「それでは、行きましょうかジェノス、もし学校に間に合わなければ王からお叱り受けることになるかもしれないからね」
ジェノス「それは、大変だ」

そんな事で怒ることはないかと確信していながらもそんな冗談を口にししながらセフィリアと将征を背負ったジェノスはへりと向かった
王の望みを叶える為に

第一章 魔王と神と三騎士と（後書き）

三毛猫ヤマトです

今回黒猫の三人に登場して貰いました

セフィリアに付いてはヒロインと言うことで性格もかなり柔らかくなっていますし原作よりも10歳も若いので出来れば全くの別人と考えて貰いたいです

ジェノスに関しては、多分その辺でナンパ何かをして祐理辺りに冷たい目で視られてると思います

ナイザーに関しては、勝手ながら一人称をオイラから俺に変えてしまいました

何かそっちの方が小説としてはカッコイイ気がしたで

次回辺りには原作キャラが登場すると思うのでよろしくお願いします

m ((m

第二章 世界情勢と王の家族と

芝公園と東京タワーの程近くにある七雄神社

紅く染まつた木々の葉は枯れ落ち冬の近づきを感じさせる寒さで立ち込める

社は朝の寒さと静けさもあつてかここが都心であることを忘れてしまふほど静かである

その社の内、平屋造りの社務所の一室で万里谷祐里は身支度を整えていた

白衣と緋袴をまとい、鏡に向かって長い髪をくしけずる

だが、その生まれつき色素が薄い茶色味が強い髪をとかしていた櫛が唐突に折れたのだ

祐里「……不吉だね。何か良くないことの前触れかしら」

その日、祐里は目を冷ました時から何か言い知れの無いモノを感じていた

それは普通の同世代の少女ならそんな日もあると言う程度で気にしないかもしれないが彼女は違う

身支度を整え拝殿へと向かうその道すがらすれ違う神職のものは彼女に対して深く頭を下げる

それに対して会釈で返す祐里

コレが彼女がこの神社で彼女がどれ程重要な立場かうかがい知ることがができる

？「やあ媛巫女、お初にお目にかかります。少しお話をさせていただけますか？」

不意に、呼び止められた

声の主はゆつくりと祐里に近づいてくる。

その足の運びは見るものが見れば、即座に只者でないと見抜けるモノだとた

祐里「……はじめまして。あなたは？」

？「や、これは失敬。申し遅れましたが私、甘粕と申します。麗しき媛巫女にお会いできて、光栄の至りですよ。以後お見知りおきを」
そう名乗りながら名刺を差し出す甘粕
受け取って一瞥する。

甘粕冬馬とあった。だが重要なのはその肩書き

祐里「正史編纂委員会の方が、私にどのような御用があるのですか？」

日本の呪術会の統括する組織の者が自分に何のようだろうと言う疑問があるが、

丁重に接する

甘粕「単刀直入に言わせて貰うと、媛巫女、貴方のお力お貸ししていただきたいのです」

祐里「……私ごとがお手伝い出来ることなど、大してないと思いますが」

甘粕「ご謙遜を。武蔵野の媛巫女であなたほどの霊視の呪力に長けた方は稀だ。ま、それ以外にも二つ理由がありますけどね」

万里谷祐里は武蔵野 関東一帯を霊的に守護する一団に属し、その中でも、若いながら媛と呼ばれる高位の巫女としての責務を果たしている

甘粕「あなたには武蔵野の媛巫女として、我ら正史編纂委員会に協力する義務がある。おわかりですね？ この際、疑問は横に置いて、話を聞いていただけますか？」

祐里「……もちろんです。では、私に何をしろと？」

甘粕「とある日本人の少年がいます。彼と会ってその正体を見極めていただきたい。西条将征と言いましてね、真正正銘のカンピオーネではないかと疑惑のある人物なのです」

祐里「カンピオーネ？」

それは欧州における、最大最凶の魔王を呼ぶ称号

思いがけない単語に祐里はひどく驚いた

この呼び名は、彼女に老いた魔王の邪眼を思い出させる

甘粕「あなたを選んだ理由の一つは、もうわかりですね？　あなたには幼い頃に、デヤンスタール・ヴォバンと遭遇した経験がありました。カンピオーネの鑑定もたやすいはずです」

祐里「……ええ。カンピオーネとはつまり、日本で言う荒ぶる鬼神の顕現、忌むべき羅刹王の化身です。ですが、信じられません。ただの人間が『王』となるためには、神を殺める必要があるのですよ？　そんな奇跡を起こせる人間が、この国にいたなんて！」

甘粕「同感です。だから私たちも、西条将征が本物だと信じてこなかった。いや、信じたくはなかった。ですが、もう、そうは言っていられなくなってきたのです。」

と、甘粕は大げさに肩をすくめてみせた。

甘粕「グリニッジの賢人議会によれば、彼、西条将征は去年な三月、エジプトのスエズ運河でギリシャの怪物テュポーンを倒し、王の資格を得たそうです。」

更にはその後数度にわたりドイツ、イタリア、トルコ等へ渡っています。その内イタリア、トルコ、ではその時期に大規模な破壊活動が起きています。

彼との因果関係は出ていませんが無関係と言うことは、考えにくい。

ー

その話を聞くうちに彼女の媛巫女たらしめる呪力　極めつけに強力な靈感と霊視の力が、訴えていた。

私はこの人物に会わなければならないと

祐里「その西条将征と言う方について、詳しくお教え下さい。」

私たち同様、何らかの呪術を修めた方なのですか？

それとも武芸の心得がおりとか？」

この件に全力で取り組む決意を固めて、祐里は訊ねた
もちろん、魔王は恐ろしい。本来なら避けて通りたいほどに。だが、自分の媛巫女として力がいつている『その方に会わねばならない』
と

甘粕「呪術や魔術に関しては、素人のはずですが、武術に関しては

かなりのモノらしいですよ。元々家が古流武術の道場で小さい頃から武術を学んでいたらしですからね。

中学時代に空手の全国大会で優勝の経験もあってその大会では、決勝も含め終始相手を圧倒していたそうです。 コレをお渡ししておきます。」

甘粕がカバンから書類の束を取り出し、渡してくれた。
それを斜め読みしてみる。

西条将征に関する調査報告書だった。彼の個人情報、経歴、海外への渡航歴、カンピオーネとしての能力等が、推測混じりに記されている。

だがその中には、目を疑うモノがあった。

それは、グリニッジの賢人議会が作成した調査書に書かれた一文
祐里「この方が、カンピオーネだと仮定したとして、そうするとこの方は、既に少なくとも二柱もの神を殺しているのですか？」

この調査書に書かれていた事を真実と仮定し調査書の作成された日時からすると僅か一年足らずの間に二柱も神を殺し権能を奪ったことになる

甘粕「ええ、グリニッジの賢人議会はそう考えているようです。ただその二柱目が何かまでは賢人議会も分かってはいないようですがね」
祐里「ですが、何故これ程までに対応が遅かったのです？」

これを見る限り彼が神を殺しの王となつてから既に一年以上が経過しています。対応としては、遅すぎるのではないのですか？」

確かに、一世紀ほど前までならともかく、本来なら情報化社会と呼ばれる現在においては、この対応は遅すぎる

甘粕「実は、どうやらあの秘密結社クロノスが彼に手を貸しているらしいんです」

祐里「ッ！、あのクロノスがですか？」

甘粕「ええ、彼に関しては、どうやらクロノスが情報操作を行っていたようでして、

流石にあのクロノス相手では情報戦で勝ち目はありませんからね。」

つと甘粕は疲れたように肩を竦める

秘密結社クロノス、現在はドイツにその本部を置く魔術結社

その情報収集、操作能力は第二次世界大戦や冷戦で培われた物であり大国でも迂闊には手を出せないような結社である

甘粕「その資料をめくってみてください。」

資料をめくってみるとそこにはプラチナブロンドの髪の少女の写真挟み込まれていた。

それは同性の祐里でさえも思わず見とれて仕舞うほどの美しい少女だった

甘粕「その娘が、彼の第一の騎士だとされている人物です。」

祐里「騎士？」

甘粕「ええ、彼女はあのクロノスの中で騎士の称号を配された人物なんですよ。」

その技量もかなりのモノだと言います。まあ、彼女は個人的に彼に忠誠を誓っているらしいんですがね、

ですが、彼の存在が明るみに出るからは、クロノスは正式に彼の傘下に入るような動き見せています。ドイツには仰ぐべき王がいませんからね。

それに今、クロノスにはかなりのアドバンテージがあります、もし同じ傘下に入るにしてもその中でクロノスは、かなりの発言権もつでしょう。恐らくはこれを狙っての情報操作でしょうね」

つまりそれは、クロノスがそれほど重要視する存在と言っことでもある

祐里「そうですか……、そう言えば、私に事を委ねる理由が二つあるとおっしゃっていましたね。もう一つを教えてくださいませんか？」

甘粕「ああ、もちろん。こちらは完全に偶然だったのですがね」

甘粕の答えを聞いて、祐里は奇妙な巡り合わせに目を丸くした。

自分と西条将征との間にそんな縁があるとは思ひもなかったのだ。

イラクから帰国して数週間、季節は秋から冬へ移り変わろうとするこの時期に、西条将征は自宅の武家屋敷と言えるような家にある道場にいた。

向かい会つのは現在中学二年になる弟の西条**咲倅**さいじょうあきめき

互いに剣道の防具を身につけて向かい合い竹刀を構えてつばぜり合いをしていた。

互いが竹刀を弾き二人の間に距離ができる、そして休むことなく咲倅は攻め立てるが、将征に全ていなされてしまう。

そして籠手を狙った所を避けら逆に横からの籠手を受けてしまい竹刀が手から落ちる

それで勝負はついた

それから互いに面を外す

咲倅「ちくしょう……また負けたあ……」

外すと同時に咲倅の叫びが道場にこだまする

将征「いや、今回はかなり危なかったぞ、実際最後の方は防ぐに必死だったからな」

悔しがっている弟に声をかける将征

咲倅「顔色ひとつ変えてなかったくせに何を言ってるんだ」

将征「そりや顔色を読まれなくするなんて、勝負事では当たり前のことだろうが」

咲倅の抗議を一刀のもと切り捨てながら道場の端に置いておいた二つのタオルの内一つを咲倅になげつける将征

咲倅「サンキュー」

タオル受け取りながら答える咲倅

咲倅「にしてやっぱし悔しいな剣道でくらいは将にいに勝ちたてえのに」

受け取ったタオルで汗を拭いながら愚痴を溢す咲倅

将征「お前、大会で俺の記録越しただろうが春の大会で全国準優勝、秋の大会で全国優勝して俺より成績はいいじゃないか 剣道だけだ」

その愚痴に呆れたように返す将征

晁倅「成績では勝った、だから今度は、将にい本人を倒す
でだけど」 剣道

最後の方は小さくボソツと呟く

将征「フツ、まだ直接対決じゃ負けるつもりはないぜ」

晁倅「絶対に負かしてやる」

そんな軽口を叩きあいながら道場を後にする二人

掻いた汗を流し風呂から揚げた将征は夕飯の席へとつく

母が作った料理で和食中心の献立である

家族四人で食卓を囲み夕飯を食べる

食べ終わった皆で後かたづけをしていた時、廊下に置いてあるの電話が鳴り出した

晁倅「あ、俺が出るよ はい、西条です。どちら様ですか？」

晁倅「あ、は、はい。確かに居ますが……、はい、分かりました、確かに伝えます。」

晁倅は何か釈然としない様子で電話の受話器を置いたがすぐに居間へと向かった

晁倅「将にい」

将征「ん？」

将征は丁度かたづけが終わり腰を下ろしたところである

晁倅「いつの間に万里谷先輩と仲良くなったんだよ」

晁倅は興奮した様子で将征に問い掛ける

将征「万里谷？ 知らないな、誰だそいつ？」

晁倅「知らないの？ 万里谷先輩って言ったらうちの学院の中等部で一番の美人って有名なんだぜ。」

因みに高等部で一番はセフィリア先輩」

将征「知らないな、んで、その万里谷さんが何だって言うんだよ？」
最後に出た名前の方は華麗にスルーをする将征

暁倅「なんでも、急な頼みで申し訳ないんだけど、将にいと会って話があったことがあるって。……これ絶対に告白だぜ。将にもやるねえ〜」

将征「まさか、そんなことナイナイ」

暁倅「とにかくちゃんと行ってくれよ。行かなかった俺が伝えてないって事になるからな」

将征「ハイハイ分かったよ。んで、待ち合わせ場所は何処なんだ？」

暁倅「七雄って神社だつてよ」

将征「神社？　なんでそんな所なんだ？」

暁倅「ああ、確か聞いた話じゃ神社で巫女さんの手伝いをしているらしいぜ。社会勉強の為とかで、

ツか、リアル巫女さんだぜ！リアル巫女！学院の男子の憧れの美少女巫女さんだぜ！」

将征「えっ？　お前ってそういう趣味？」

暁倅「別にコスプレが好きって訳じゃねえよ。ただ元が良いと服は何でも栄えて見えるもんだろ！」

将征「ああ、分かったから落ちつけて、……にしても巫女ねえ〜」

将征の中では呼び出された理由が漠然とだが頭に浮かんでくる。だが確証はない、

たが一応やれることはやっておこうと廊下に出て携帯を取り出し将征はある番号へと電話を掛けるのだった

第二章 世界情勢と王の家族と（後書き）

三毛猫ヤマトです

書いてみましたが、クロノスの行動とかに疑問を感じるかも知れませんがその辺はスルーでお願いします（汗）

ただ単に、主人公と祐里との接触の時には、主人公の権能を二つか三つ位にしたかったからと言う理由での空白期間ですので、

その所、宜しく願います

所で、セフィリアさんをデレさせると某種のピンクの歌姫みたいになって仕舞いそうなんですが、その所も宜しく願いますm（

――）m

戦闘中は、もちろん黒猫のセフィリアさんです

第三章 巫女との対談と武人の誓いと少女との約束と（前書き）

何か無理矢理に感じられるかも知れませんがコレが作者の精一杯ですのでご容赦ください

第三章 巫女との対談と武人の誓いと少女との約束と

三人称

優に二百段はある石段を登り待ち合わせの場所 七雄神社に西条

将征は到着した

鳥居をくぐり、境内に足を踏み入れる

将征を出迎え手くれたのは、巫女装束の少女だった

祐里「よくいらして下さいました、西条将征さま 。カンピオー

ネである御身をお呼び立てした無礼を、お許しくださいませ」

と巫女の少女は深々と頭を垂れた

彼女が顔を上げた瞬間、なぜ弟の咄俅があれだけ『すごい』と繰り返したのか、理解した

祐里「万里谷祐里と申します。昨日は行きなりお電話をおかけして、失礼いたしました」

万里谷祐里は、たしかに吹聴したくなるほどの美少女だった

将征の知り合いの中で、抜きん出た美しい少女はセフィリア・アイクスである

だが、万里谷嬢も負けず劣らずだ。

将征「君はあちら、ヨーロッパなんかの魔術師のようないわゆる裏の人間で合っているかな？ たしか正史編纂委員会と言ったかな？」

祐里「はい。その通りです。私は武蔵野を守護する巫女のひとりとして、この社でお勤めをしています。ささやかですが、呪術の心得もございます」

将征「そうか……、それじゃあ本題に入ろうか、俺をここへ呼び出した理由に」

祐里「はい。私があなた様をお呼び立てした理由は、失礼ながらあなた様が本物のカンピオーネであるか、それを確かめるためでございます。長い歴史の中、今だ嘗てこの国にはカンピオーネとなった

方は一人もいらつしやいませんでした。それゆえ、この国の歴史上初のカンピオーネと呼ばれるあなたが本物であるか、実際に貴方さまをこの目で見るまで失礼ながら信じられませんでした。どうか我が身の失礼をお許しくださいませ」

つと祐里は深々と頭を下げる

将征「……、少し聞いてもいいかな？」

祐里「私に答えられるものならなんなりと」

将征「君の話を聞くと、君は既に俺がカンピオーネだと確信しているようだけど、なぜそうだと断言できるんだい？」

祐里「それは私の力によるものです。私の目は、この世の神秘を読み解く霊眼なのです。……以前、西条さまの同胞たるヴォバン侯とお会いしたことがございます。カンピオーネ　羅刹王の化身たる方々を見誤ったりはいたしません」

静かな自信を込めて、祐里は言い切った

将征「あの偏屈じいさんに会ったことがあるのか」

それに対して将征は苦々しげに言う

祐里「お会いしたことがあるのですか？」

将征「ああ、あのじいさんとは、トルコで少しやり合ってたね」

祐里「ッ！、あのヴォバン侯爵と争われたのですか？」

将征「お互い、痛み分けだったけどね」

と肩を竦めながら話す将征

それを信じられないような目で見る祐里

当然だ、相手は二世紀以上に渡りこの世界に君臨する最古参の魔王である

それに、トルコで言うことは、彼はまだ魔王となつて半年程しか経っていないかった筈である

それなのに、目の前にいる最年少の魔王はその最古参の魔王と争い、引き分けたと言うのだから当然である

祐里「聞いてもよろしいでしょうか？」

将征「ん？　ああ構わないよ」

祐里「西条さま、貴方さまが魔王としてその力を振るう理由はなんですか？」

将征「ん？（確か初めて会った時セフィリアにも訊かれたな）」
「と思い頭を掻きながら答える」

将征「俺は、武術家だ。幼い頃から祖父に武術を教え込まれてきた。そして武術の存在意義とは、不当な暴力に立ち向かうこと」

魔王はゆつくりと噛み締めるように言葉紡ぐ

将征「^{ほこ}戈を止めると書いて『武』、暴力を制する道、武道」

その瞳はどこまで、透き通った色をしていた

将征「俺にとって武道と言うは、弱い者、力の無い者を暴力（戈）から守る（止める）ためのモノだ」

将征「だけど俺は手に入れてしまった、絶対的な暴力と言うべき力を、もう俺自身を脅かすモノなんて無い、そうとまで言える様な力を」

そしてその透き通った瞳の奥には、確固たる意思が見てとれた

将征「なら今度はその力で弱い者、力の無い者を神って言う名前の暴力（戈）から守る（止める）って王としてなんかじゃなく俺は武術家としてそう誓った」 将征Side Out

祐里Side

石段から彼が姿を見せ一目その姿を見た時私は確信した彼は真の魔王、カンピオーネであると

もう疑う余地などない、目の前にこの方こそが最も新しき魔王であると

彼は私が所属している私立城楠学院の高等部の制服を着ているが上着は左腕をズボンのポケットに入れた部分に掛かっている

初めて見たがその着方は彼にとっても似合っていると思った

だが、ここからが本番だ、もしも彼の怒りなどに触れれば私など一瞬の内に殺されて仕舞うだから

そして、彼の会話が始まった

彼が此方（正史編纂委員会）の事を既に知っていたこと等には驚かなかったが

まさか、ヴォバン侯爵と闘ったと言う話には驚いた

私にとつてヴォバン侯爵とは恐怖象徴とも言うべき存在だ

あの暗闇でも燃える猛虎の双眼じみたエメラルド色の瞳、睨み付けるだけで生者を塩に変える邪眼であるその魔王の瞳の色を私は一生忘れないだろう

だが、確か資料で読んだ彼の渡航記録では、彼がトルコを訪れたのは去年の秋、彼がカンピオーネとなつてからまだ半年しか経っていなかったはずだそれなのに彼はあの魔王と闘い更には引き分けたと言う

その話を聞いた後、私は彼に問いを掛けていた

何故？と訊かれたら『分からない』と、としか言えないが私には、

この時『私は、訊かねばならない』と言う確信にも近い何かがあった
そして聞いた彼の想いを、誓いを、

それを聞いて私は感動した

私を知る魔王と呼ばれる存在は傍若無人でその裁定は何人も逆らうことの出来ない絶対のものでまさに恐怖の象徴と言うべき存在だ
話で聞いた他の魔王の噂も程度の差はあれど似たり寄ったりである
そんな中、目の前の新しき魔王はまさに国を守る王と言うべき存在だった

私は感動し胸の内に熱い思いが沸き上がるのを感じていた

祐里 Side Out

将征 Side

それから、俺は祐里と別れどこにでもあるような街角の喫茶店に来ている

対面の席には、セフィリアが座つて紅茶を優雅に飲んでいる

セフィリア「それで、どうでしたか？何か変わったことはありませんか？」

将征「別段何も変わったことはなかったぞ。アッチは俺が本物カンピオーネか確かめたかっただけみたいだし」

セフィリア「そうですか。それは良かった。」

それを聞いて安心した様に呟くセフィリア

将征「強いて挙げるとすれば手伝わせて欲しいと言われたことくらいかな」

セフィリア「手伝う？」

セフィリアはキョトンとした顔で首を傾げる

不味い不覚にも可愛いと思ってしまうた

何が不覚なのか自分でも分からないが

将征「あ、ああもし『まつろわぬ神』や他の『王』と闘う事になったら俺を手伝いたいて言われたよ」

セフィリア「そう…ですか」

それを聞いて口元に左手を添えて何か考えむセフィリア

にしても何でコイツは、こう何でもかんでも絵になるのかね

とその美しい絵画の様な佇まいを眺めながら自分の紅茶を飲む

セフィリア「それは、正史編纂委員会の彼女が言うことですか？」

将征「いや、俺もそこを訊いてみたんだが、彼女が自分の意思で個人的に手伝いたいと言うことらしい」

セフィリア「自分の意思で……」

セフィリアは噛み締める様にゆっくりと言う

それほどおかしいことだろうか？

セフィリア「……、今考えても仕方ありませんね」

どうやらセフィリアの中で一応決着がついたようだとすると

セフィリア「さて、では約束の買い物に付き合って頂きますよ」

将征「今から？」

セフィリア「当たり前です。元々今日は私の買い物に付き合ってく

れる約束だったのに急に違う女性との約束入れるなんて女性に対して失礼だと思わないんですか？」

将征「うっ」

それを言われると

セフィリア「さあ行きましょう将征」

セフィリアは満面の笑みを浮かべながら俺の腕をとり会計を済ませ日が落ち人工の光が照らす街中へと俺を連れ出した

俺は隣で俺の腕に自分の腕を絡め

笑みを浮かべる上機嫌なセフィリアに何も言えなかった

第三章 巫女との対談と武人の誓いと少女との約束と（後書き）

三毛猫ヤマトです

祐里との対談は難産でした

祐里をどうやって主人公側に入れるか？で悩みました

原作の様に神をだして共闘と言うのも考えたのですが主人公が本編迄に手に入れる権能は設定で書いた通り四つ位にしたいので第一章で三つ目を手に入れているので、最後の一つは海外への遠征？で取ると前から考えていたので神を出すわけにもいかず悩んだ結果がこれでした

悩んだわりにパツとしないかも知れませんが前書きの通りコレが作者限界なので申し訳ございません

後、主人公の闘う理由云々は気づいた方もいると思いますがグレースブラー刃牙からの持って来たものです

主人公の服装についてはまんま奪還屋のデル・カイザーの着方です
至らない所も多いと思いますが宜しく願いますm（――）m
草薙は最初に言った主人公の権能の四つとは別口ですので

第四章 騒動と思惑と明王の降臨と（前書き）

すみません

感想で海外遠征？に行く等と言って行ってます
申し訳ありませんm（―）（―）m

第四章 騒動と思惑と明王の降臨と

将征Side Out

対談の当日は家に帰れば待ち構えていた弟に捕まり「どうだった？」

「やつぱり告白だった？」「巫女姿はどうだった？」「どこまでいった？」等と質問攻めにあつた

質問の内容に若干違和感があるがその辺は、その後にあつたセフィリアとのシヨッピングが長引き、

外で一緒に夕食を済ませてしまつて帰宅の時間が遅かつたこともそれに拍車かけていたのだろう

祐里とのことは別段何もなかつた説明するが

なら何でこんな時間まで帰るのが遅れたのかと問われれば返答に詰まつてしまう

まさか別の女性と一緒に居たなどと言えばさらに騒ぎが大きくなるのは目にみえている

さらにその相手がセフィリア・アークスだと知らればさらに騒ぎが大きくなってしまう

先日弟の話だとセフィリアも学院では祐里と同等かそれ以上の人気を持っているのは明白である

ただでさえ学院の中等部で一番の美少女と呼ばれる祐里に直接話したいと誘われた

と言つだけでも先日の騒ぎようである、ここで下手なことを言つて話が広まり

最悪学院生徒にまで広まつたならまずい

祐里のことは知らなかったが、同じ高等部で更にはクラスメートと言つこともあつてセフィリアの人気は知っている

それと同等と言つのだから祐里の人気の高さもうかがい知ることが出来る

そんな相手に会いたいと誘われた等ということ知られれば大変なこ

とになる（主に男子からの妬みの視線や恨み言などが）

そんな学生生活は絶対に遠慮したい

さらにその後にはセフィリアのショッピングに付き合いあまつさえ夕食を一緒にした等と男子生徒に知られた日には……………

止めよう、考えるのはよそう、鬱になる

そんな考えが頭をよぎりここは黙して語らずが吉、沈黙は金といったところだろうと考え言葉を濁しながら早々に部屋に退散することにした

だがそんなことは、何の意味もなかったのだと次の日に実感することになった

次の日、その日は別段何か特別な行事等があるわけでもなく、いつも通りに学院に登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りに友人と過ごし、いつも通りに下校する筈だったが、

そんな平穏な日常は脆くも崩れ去った

事件があったのは放課後のことだった

その日も、何か特別な用事ある訳でもないので普通に家に帰宅し道場で鍛錬をしようと考えていたのだ

因みに部活はカンピオーネとなった時からやっていない

だが、校門が見えてきた辺りでその校門に最近見知った、と言うか昨日知り合った万里谷祐里が佇んでいた

その回りを二、三人男子生徒が囲んで一緒に話をしているが

どうやら祐里が用事があるのは別の人物のようだ

さつき程から見ていると幾らか話した後その男子生徒等は離れていきそれを待っていたかのように新しい男子生徒が彼女に話しかけている彼女自信は結構戸惑っているようだが

そんなことを遠くから眺めていたが自分には関係ないと判断し普通に校門から出ようとしたところで

祐里「あっ！西条さん」

何と男子生徒と話していた祐里から呼び止められたのだ振り向けば、まるでがれていていた親をやっと見つけた子供のよう

安心した表情の祐里が自分に近づいてくるところだった

だが、その回りでは男女問わず校門付近にいた生徒の視線がこちらに集まっているのを感じる

祐里「良かった、もしかしたらもう既に帰ってしまったのかと思っていました」

そう言うのと本当に安堵したようにホッと息をだす祐里

将征「え？、ああゝええゝと、俺に何か用事でもあった？」

祐里「用事と言うほどではないのですが、そのゝ、」

祐里の言葉がドンドン尻すぼみになっていく

顔も幾らか赤いようだ

祐里「帰りの道を一緒にしてもよろしいでしょうか？」

顔を赤らめながらも言う

将征「あ、ああゝ俺は別に構わないよ」

それを聞いてまた安心したようにホッと息をはく祐里

祐里「それでは、お帰りしましょう。では皆さんご機嫌よう」

と言うと祐里は先ほどまで話していた男子生徒に対して頭を下げるそれに釣られたのか頭を下げる男子生徒たち

俺はその後に起きる混乱を危惧して俺は祐里を連れて足早にその場を去った

その後、校門では「あの万里谷と武神が？」「嘘？、そんなあゝ」

「キヤー、私、西条君のこと狙ってたのにいゝ」「こ、これは夢だ、夢に違いない」「だけどあの万里谷の表情……、あの顔は……」「

くそゝ、なんでアイツばかりもてるんだあゝ」「どうする？ 闇討ちでもするか？」「いや冷静になれ、相手はあの武神だぞ、勝ち目はない」等と阿鼻叫喚の地獄絵図だったのだが、二人は知るよしもない

将征 Side Out

祐里 Side

対談の後、訪れた甘粕さんに西条さん（呼び方は将征が頼んだ）は正真正銘のカンピオーネであると告げた

さらに、彼が二柱以上の神を殺しているのは確実だとも告げた

その後、甘粕さんから西条さんに実際に会って感じた人となり等々と訊かれたので

王としては珍しい、とても素晴らしい人格の持ち主であると返したその後、西条さんのことを個人的に手伝いと言った時は、目を見開いて驚かれたが

既に西条さんに伝えて了承は得ていると言ったら

途端に満面の笑みとなり、「それは言い、是非とも西条氏とは仲良く、いや是非とも親密になつて下さい」

「有事の際の協力なんて言わず日常的に仲良くするべきです」「こう言うの信頼関係が大事なんです」

「信頼出来ない人に背中を預けるモノはいません」「高等部と中等部で校舎などは違いますからね、まずは登下校あたりから」

「なに、ご心配なく、われわれ正史編纂委員会が全面的にバックアップいたしますから」

等と甘粕さんから一気に捲し立てられた

何故かそれに妙な予感、嫌悪感と不思議な高揚感が感じたが甘粕さんの言っていることも一理あるので頭から否定はできない

だが殿方と二人きりで帰るなど／＼と顔を赤らめている祐里の後ろでは

「これを委員会の提出して」「これでライバル役は」等と言い顔を赤らめてうつむいた表情で周りが見えていない状態の祐里の写真とる甘粕がいたのだった

祐里 Side Out

将征 Side

結局その日は、祐里と駅まで一緒に帰り、そこで別れた

「何で急に一緒に？」と訊けば手伝うと言ってもいきなり、よく知りしない相手と協力なんて出来ないだろうからと言われた確かにその通りである

特に俺が戦う相手は神や王と言った化物クラスなのだし、そこは戦場なのだからその言い分は当然のように聞こえた

だが祐里を駅の改札から見送った後振り向くとソコには満面の笑みを浮かべたセフィリアが立っていた

だが、何故かその笑顔からはいつもとは違う雰囲気を感じた

何故か暑くもないのに額からは汗が出る

将征「セ、セフィリア、どうしたんだ？こんなところで」

セフィリア「たまたまアナタが万里谷さんとそれは楽しそうに歩いているのを見かけまして、一応騎士としてアナタの側へ控えて居ただけですよ」

と笑顔のまま答える

何故だろう背中から汗が出て止まらない

将征「そ、そっか、ありがとうなセフィリア、見ていた通り別段何も変わったことはなかったぜ」

セフィリア「ええ、見ていましたよ。二人でとても楽しそうに仲良くお話をしているの」

……………あれ？

何でだろう、セフィリアの後ろに明王がみえるんだけど（汗）

前にカンピオーネになった後に初めてやった模擬戦で見せられたあの技を思い出す

と言うかあれはカンピオーネだからって人間に出す技じゃないだろう、あれ！

本当にあの時はセフィリアの剣の先から不動明王な姿が見えたからなセフィリア「ところで、この後時間がありますか？」

言っている言葉は問いかけだがなぜかその言葉には有無言わせない力を感じ領いてしまっていた

将征「あ、ああ大丈夫だぞ」

セフィリア「ならこの後お宅にお邪魔してもよろしいですか？」

将征「え！？、な、なぜ？急に」

セフィリア「久しぶりに御手合わせして戴きたいのです」

将征「あ、ああ、そういうことか、別に構わないぞ」

セフィリア「では、早速行きましょう」

将征「あ、ああ」

そう言うと言うが早いかセフィリアは俺の腕をとって俺を引っ張っていく

セフィリア「ああ、ご家族の方々にもご挨拶しなければなりませんね」

将征「え」

セフィリア「将征にはいつもお世話になってますからね、ご家族の方々にもちゃんとご挨拶しなければなりません」

セフィリア「それに、私はアナタの騎士なので、そういう意味でも主のご家族にはきちんとしておかなければなりません」と笑顔でのたまうセフィリア

正論なので何の反論できず俺はセフィリアに腕を引かれながら家に帰宅することになった

そして帰宅した時、間がわるく家に揃っている我が家族

弟は、昨日は万里谷先輩と、今日はセフィリア先輩を家にまで連れて来てどういうことだと問い詰めてくるし

母は母でセフィリアと「いつも内の息子が」「いえいえ、こちらこそ、いつも良くしてもらって」「コレからも内の息子のことを」「こちらこそ不束者ですが」等とお互い正座をして頭をさげあっている祖父は祖父でセフィリアの立ち振舞いを見て「ほぼ、出来るな」等と呟いて目を細めているしで混沌とした空間が出来上がってしまったその後、何とか振り切り二人で道場に行くことができ二人で久しぶりの模擬戦を行なった

そしてその日道場に不動明王が降臨したのは言うまでもない

将征Side Out

第四章 騒動と思惑と明王の降臨と（後書き）

三毛猫ヤマトです

祐里については護堂と違い男女関係などで問題がある訳ではないのでこんなふうに普通に近寄せました

更に既に将征に手伝うということに得ているというので愛人の選考などのイベントは無しに

セフィリアのキャラについてはヒロインと言うことで見逃して下さい滅界については魔術による強化、肉体への負担の軽減等を行っているので殆どリスクはない設定です

次こそは海外でジェノスあたりを出しますのでコレからもよろしく願います

m (— —) m

第五章 弁当とナンパと神具と

結局その日は、祐里と一緒に帰り別れたところでセフィリアに捕まり、家で一緒に鍛錬をすることになった

その後、セフィリアに手を引かれながら家に帰宅、うちの家族とセフィリアのご対面、そして混沌とした居間からセフィリアをやつとの思いで連れ出し道場で当初の目的だった鍛錬を始めることができたのは帰宅してから二時間もたった後だった

鍛錬の内容としては将征にとって、セフィリアの剣術には大いに学ぶべきところが幾つもありセフィリアとの鍛錬はとても充実したモノなのだ

中でもセフィリアの無音移動術『桜舞』は達人でも会得するの十年はかかると言われる代物である

将征も会得したいと常々思っていたのだが身近で使えるモノもあらず（祖父も使えるが自分の力で調べ、学び、修得しろと言って見せてはくれない）

頭を悩ませていたときセフィリアと言う完成形に出会うことが出来たのだ

故にセフィリアとの鍛錬の時はいつも桜舞を見せて貰い日夜修得しようとして鍛錬を続けているのだ

そうして一通り型をやった後に二人は模擬戦に移り弟が夕飯に呼びに来るまでそれは続けた

その模擬戦の最中に明王が降臨したが何とか生き残る事に成功した将征であった

そして、母に勧められ夕飯食べていくことになったセフィリア

そして、その日の夕食は何故か鯛や赤飯など豪華なモノばかりであったとか

そして、夕食の後、セフィリアを自宅であるマンションまで送り、その日は過ぎ去った

だが、問題は次の日からである

次の日、学校に登校してみると案の定、昨日の祐里とのことで質問攻めにあい

更には、珍しく母がお弁当を作り忘れたと言うことで学食を食べようかと昼休みに席を立てば

セフィリアに呼ぶ止められた、見ればセフィリアの手に握られた二つの弁当（母とセフィリアによる計画的犯行、もちろん将征は知らない）

訊けば朝に作り過ぎてしまい友達と皆で食べようかと思つて持つて来たらしい二つ目の弁当

そして、弁当が無いのなら一緒に食べようと言うお誘い

食欲に負けこれを承諾してしまい、セフィリアと二人でセフィリアの作った弁当を食べることになった

そして、もし良ければこれから毎日俺の弁当を作つて来ようかと言う話になり、その時のセフィリアの迫力に押されそれを承諾し以降、毎日セフィリアの弁当を二人で食べることになり

そして帰りには、セフィリアも加わつた祐里との三人で一緒に帰るようになった

そして始まつた男子から寄せられる負の想念

嫉妬、憎しみ、嫌悪、殺意、敵意

日を追うごとに、増す周囲の男子からの放たれる黒いオーラ（特に野球、ラグビー等の部員）

そんな中、一週間が過ぎた時、将征の元に一本の報せが届いたのだ

冬のドイツ

そこに、将征達は訪れていた

達と言っても人数は将征を含め三人、将征と将征の第一の騎士、セフィリア・アークスと武蔵野を守る媛巫女の一人、万里谷祐里の三

人である

彼らがドイツを訪れた理由、それは一昨日に将征の元に届いた報告が原因である

電話の相手は先日、セフィリアに続き将征の騎士となったジェノス・ハザードからであり

その内容は、ドイツでまつろわぬ神に関すると思われる品が出土し最近までそれが何の神に関するものか調査をしていたところ最近になって呪力を蓄えだしたと言うものである

さらに、このままでは近い内にまつろわぬ神が降臨してしまうだろうと言うのだ

その報せん受け、丁度その日から冬休みに入ったことを利用してクロノスの所有する飛行機に乗り一行はドイツを訪れているのである
「さて、案内役はどこにいるんだ？」

「すでに、来ているはずなのですが」

「案内役の方とはどんな方なのですか？」

「黒いスーツを着た深い緑の髪の男んだけど」

「うーん」

三人で周りを見渡すがそれらしい人物は見当たらない

「取りあえずエントランス辺りに行ってみるか」

「そうですね、案外まだ来ていないのかも知れませんがそこなら入ってきたら気づくでしょうから」

そういつて空港のエントランスに向かう三人だが、途中で

「うおうつー！、な~~~~んてビューチフリヤな瞳なんだ」

と聞き覚えのある声が聞こえてきた

「どうです？今度二人きりでお食事でも！」

「結構です！」

ソチラを見るとそこには案の定見覚えのある顔が女性をナンパし見事にフラれているところだった

「……あら、この辺りの女の子はガードが固いぞすねエ」

「ジェノス!!!」

「うわっち!!」

「あなた迎えにも来ないで何をやっているんですか」

「あ!お、お嬢、も、もう着いたの?」

「とつくに着いています!はあ!全くあなたは王を待たせてナンパをしているなんて」

そういつてセフィリアは顔に手を当てて大きな溜め息をはいた「まあその辺にしておけセフィリア」

「ですが…」

「俺は気にしていないから、良いんだって」

俺がそう言つとしぶしぶとだが頷いた、了解ということだろう

「さっすが将征の旦那!!!ありがとうございます!!!」

するとすぐにいつもの調子に戻るジェノス

「はあ〜」

まっここがジェノスの良いところなんだけどな

「あ、あの〜」

「「「?」」」

「こちらの方は?」

「ああ!紹介するよ、この人がさっき探していた案内役の」

「ジェノス・ハザードです。よろしく可愛らしいお嬢さん(日本語)

」

「あ、は、はい」

「どうです?今度食事でもごいつsy」

「ジェ・ノ・ス?」

「はい!!!今、すぐに案内させて頂きます」

挨拶一番に祐里を口説こうとしたジェノスだったがセフィリアの一言により

気をつけの姿勢で敬礼をして案内を始めた
そんな姿を見て俺は溜め息しか出てこない

「さてと、着きましたぜ。ここです」

ジェノスに案内されて着いたのは街から遠く離れた密林の中にある建物だった

どうやら調査中、呪力が上がり始めてことから神具を急遽こちらに移動させたいらしい

まあ、正しい判断だ、まつろわぬ神が関わっている可能性のある神具だ

もしかすればそれを求めてまつろわぬ神が訪れるかもしれない

それに、もしまつろわぬ神が現れたとしたらそれと戦うのは王だ

王と神との戦闘は場合によっては都市が一つ二つ壊滅するような規模にもなるのだ

そんな危険なもの街中に置いておくわけには行かないのは当たり前である

特にその神と戦う魔王が俺なのだから当然だ

俺が本気で戦えばそれこそ都市の一つや二つが壊滅する可能性が出てくる

最近コントロールが利くようになってきたがそれでも一撃の威力が高いのである、それこそ一撃で地面に大穴ができる程に

そんな権能を街中で使うわけにはいかないし

他の権能だけで戦うことも出来るが、神に対して手加減なんかをしている余裕なんてないのだからこの判断は正しいと言える

「神具は、この地下室に張った結界の中にあるんすよ」

「中には誰が？」

「ナイザーの奴が見張ってますよ」

「じゃあ、まずはその神具つてのを見てみるか」

「ええ、丁度コチラには本場イングランドや東欧で上回る者はいないと言われた霊視術師の祐里がいますしね。何かわかるかも知れません」

「そ、そんな、私の霊視は何でも『見える』ほど便利なものではあ

りませんよ。何もわからないときだつて多いのですから」霊視の呪力とは、決して万能の解析力を意味しない

神が気まぐれにささやく天啓を厳肅に受けとるだけの、とても不確かで当てにならない力なのだ

「別に気負う必要はないさ、もともと今も何もわかっていない状態なんだから別に何も見えなくても何がマイナスになる訳じゃないんだからさ」

ツとジェノスは言う

「そうそう、ジェノスの言うとおり、気負う必要はないよ。どんな神が来たつてその神は俺が倒す、それは変わらないんだから君は何も気負う必要はないよ」

「……はい、わかりました。それと気遣いありがとうございます」

「気にしない、気にしない、ねえ？旦那」

「ああ」

そんな会話をしている内に地下室へと到着した

「久しぶりだね、ナイザー」

「待つてましたよ。大将」

部屋の中、丁度中央何かが置かれているのはところの前に黒いスーツにスキンヘッドの男、ジェノスと共に俺のに仕える騎士となつてくれたナイザーが立っている

「それで、それが出土された神具ですか？」

「ああ、何かの武器のようにも見えなくもないんだが、調査が途中終わつちまったからな、一体どの神さんの物かわからねえんだよ」

そう言つてナイザーは皆に見えるように中央に置かれている物の前からよけた

「ッ！」

「ッ！、将征？」

「旦那？」

「大将？」

それを視た瞬間、俺の中の怪物の権能が反応した

まるで旧来の宿敵に会ったような

まるでそれに大切なモノを奪われたかのような敵意、怒りが俺の中で渦巻く

俺はどうかその昂りを抑えようと自分の身体を抱き締める

「ハア、ハア、ハアハア」

いつの間にか呼吸も荒くなっている

そんな俺を心配そうに見詰める俺に仕えてくれている三人の騎士そして、そんな中で霊視の巫女の声が響きわたる

「それは不遇の英雄、王として生まれる筈が、王になれなかった者」
「え？」

それは誰の挙げた疑問の声だったかはわからない、或いはその場にいた霊視の巫女以外の全員が挙げたものかもしれない
そんな中でも巫女は虚空を見詰め語り続ける

「その者は罪を犯し、償う為に数多の功業を打ち立てた英雄」

「英雄？」

「わかったの？コレの持ち主の神が？」

俺とセフィリアが声を挙げる

すると祐里の目が正気に戻った「わかりました！私、わかりましたっ。この神具が力を宿す神が」

「やりましたね！祐里」

「やったな祐里ちゃん！手柄だぜ」

「大したもんだ、やるじゃねえかい、嬢ちゃん」

「それで、何って神様なんだいソイツは？」

ジエノスが聞く

「彼は不遇の英雄です。受けるはずの祝福を受けられず、数々の苦難を与えられながらも、それに打ち勝った英雄」

「それで、その英雄の名前は？」

「申し訳ありません、もう頭の中ではすっかり理解しているのですが、上手く言葉にならないのです。名前も、もう喉元まで出かかっているのですが……」つまり、自分の感じ取ったイメージを上手く

言語化出来ないのだ

うなだれる祐里

数学の天才が直感的に得た解答を数式で説明できないことがあるように、神の本質を直感で解き明かした祐里には、それを凡人に伝える語彙がないのだ

「す、すいません、西条さん。私せつかくついてきても何の力にもなれなくて……。私にはこの力しかないのに、肝心なところでお役に立てないなんて……」

祐里がうつむく

そこに声がかかる

「そんなことはない、神についてなら今の君の言葉で確信が持てたよ。ありがとう祐里」

その言葉に皆が将征の方を振り向く

今の言葉は、つまりこね神具の主がわかったと言ったことだ

「わかったの将征？」

「ああ、祐里のおかげでな」

「でも、何で？」

魔王は語りだす

「コイツを視た時から、俺の中の怪物が反応してるんだよ」

巫女から得た答えを

「コイツは敵だ、憎い奴だ、仇だつてな」

相対すべき神の正体を

「俺の中の怪物がそんな反応するやつは限られている、そんな中で英雄なんて呼ばれてる奴は一人だけだ」

「それって？」

それは怪物にとっては仇の名

「ギリシャの英雄神ヘラクレスだよ」

俺は部屋の中央に置いてある巨大な石斧を見詰めながらその名前を口にした

第五章 弁当とナンパと神具と（後書き）

三毛猫ヤマトです

ヘラクレスの旦那に登場して貰うことにしました

神具については、型月のフェイトに登場するヘラクレスが持っていたあれです

次は遂に神との戦いになると思います

やっと主人公の権能を登場させられそうです
毎度ですが

よろしく願います

m (— —) m

追伸

型月のアインツベルン家ってドイツでしたよね？

第六章 魔王と英雄と権能と

その後、地下室から出た俺たちは

祐里は旅の疲れが出たのか今は割り当てられた自分の部屋で休んでいる

ジェノスはナイザーと交代し地下室で神具の見張りを

残る者達は一階の広間に集まり今後の対応を考えていた

「んでどうするつもりなんです？」

「どうって、何が？」

「かの英雄神に対して、何か勝算はあるのか？ってことっすよ大将」
セフィリアとナイザーが問いかけてくる

「それなら何とかなると思うぞ」

「勝算があるんすか？」

「あるっと思うか、ただ負ける気がないだけだ」

「本当に大丈夫？」

セフィリアが心配そうに問いかけてくる

「相手は『鋼』の英雄だ、弱点は『火』、そして俺の権能は言うなれば『大地の炎』だ、なら俺はただ真っ正面から全力でやりあうだけだ」

それは暗に彼が自身の最大の権能を使うと言うことに他ならない

「強いて上げるとしたら周りを巻き込まないように離れるくらいだろ、あれは周りの被害がデカイからな」

「わかりました。今から移動しますか？」

「出来ればそうしたいな、ここじゃあ山火事になるだろうし」

「んじゃあゝ決まりだ、俺が車を用意してくるんで大将達は動けるよう準備してください」

そう言っただけナイザーは立ち上がった

「頼むな、ナイザー」

「私は祐里にこのことを伝えてきます」

そう言つてセフィリアも祐里の部屋へと向かう

「俺は、ジェノスと一緒にアレを運び出すか」

そう言いながら俺も地下室へと向かう

そしてジェノスに事情を説明し神具運び出す

外には、車は二台停まっております、内一台はトラック、おそらくここ
まで神具を運んできたものだろう

トラックの荷台の内側には何やら魔術的な模様が書かれていてコレ
が結界の役割をすると言うことだろう

もう一台はワゴン車である

「祐里とかの方は準備できたか？」

セフィリア達、騎士は元から最低限の物しか準備していないので問
題はない

「はい、大丈夫です。問題ありません」

俺の問いに答える祐里

「んじゃあゝさつさと運ぶか」

そして神具を外に持ち出し、トラックに積む込もうと時にそれは現
れた

ふと視界に入つた森の中から二メートルを越す長身の大男がコチラ
に向かって来るのが見えた

そして目があった

そしてお互いに直感する

互いが互いにとっての宿敵であると

「将征？」

「西条さん？」

俺の変化にいち早く気づいたのかセフィリアと祐里が俺に問いかけ
てくる

そんな中、俺の体は自身のベストコンディションへと近づいていく
カンピオーネの特性が危地に際し心身を臨戦態勢へと持っていくのだ
「みんな、それを置いて直ぐにここから離れる」

その声に反応してジェノスとナイザーも俺の方を向く

そして全員が俺の視線の先の森の中からコチラに向かって歩いてくる男に気づく

「セフィリア、ナイザー、ジェノス、ここを離れたら、ここ等辺から出来るだけ火が広まらないように出来るか？」

俺は男から目を離さずに三人の騎士に問いかける

「もちろんです。任せてください」

セフィリアが俺に応える

他の二人も了解と返事をしてくれた

「準備が出来たら合図をくれ、そして祐里、ここからは俺の仕事だからセフィリア達と一緒に離れててくれ」

そう言つて俺は宿敵に向かって歩き出す

「……、わかりました、西条さんどうかご武運を」

背中にかけられる祐里の応援に手を上げて応える

そして四人は車を置いて神とは反対の方向の森の中へと消える

そして建物の前の開けた空間に男が入ってくる

その男は、服の上からでも分かる鍛えられた肉体に浅黒肌、黒い髪を生やした姿をしていた

「ヘラクレスであつてよな？アンタの名前」

「我の名を既に知っているのか、神殺しよ」

「アレ、アンタの持ち物なんだろ？アレを見たからわかったんだ」

俺は後ろに置いてある神具、巨大な石斧を指しながら言う

「さよう、それは我が武具なり、そして神殺しよ我と貴殿達は宿敵、我も英雄たる神として貴殿と戦わねばならない」

「ああ、わかつてるさ」

そしてお互いが相手の出方をうかがう

空気が変わる、まるでその辺一帯が静寂につつまれたかの様な錯覚を覚えるほどに

そんな中、先に動いたのはヘラクレスだった

何の小細工もない突進、だがそれは人外の速さ、二メートルを越す巨体がそんな速さで向かって来るのだ

当たれば一溜まりもないだろう

将征はそれを咄嗟に横へとかわす

ヘラクレスはそのまま将征が居た空間を通り過ぎ後ろにあるトラックへと突っ込んだ

だが、吹き飛んだのはトラックの方、重さ数百キロの車が宙を舞うそして地上に落下、土煙が舞い上がり視界を遮る

そんな中、直感的に将征はまたしても横へと身体を動かす

その直感は正しく、さっきまで将征が居た場所の地面には大きな石斧が降り下ろされていた

土煙がおさまれば、そこにはヘラクレスが自身の武具である巨大な石斧を降り下ろした体制で立っていた

おそらく先程トラックに衝突した時に回収したのだろう

こちらも得物がなければふりだなと将征は結論した

「どうした？神殺しよ、逃げるばかりでは我には勝てんぞ」

「ああ、わかってるさ」

先程と全く同じ言葉を口にする将征

だが、次に彼の口から出た言葉は

「我が手に宿るは、王権の象徴、闇夜を切り裂く光なり」

それは、言霊、力を発するための呪文

その言葉と共に将征の手には光輝く剣が握られていた

「それが貴殿が篡奪した権能か？」

「ああ、そっちは得物を使ってくるみたいだからな、流石に英雄ヘラクレス相手に徒手空拳は辛いだろう？」

とぼやく将征、だが胸の内では（今はな）と言う言葉を付け足していた

そして互いが同時に地面を蹴りそれぞれが剣を、斧を振るう

そして衝撃、互いの武器が衝突し衝撃を生む

両者は互いに相手を打ち負かそうと言う気概を持って打ち込んで行った

だが結果は将征が打ち負け、後方に吹っ飛ばされ木に激突してしまう

（やっぱり力比べじゃかなわないか）

いかな神殺しと言えど彼の英雄ヘラクレスの天を支える程と言われる剛力には勝つことは出来ない

「これで終わりと言うことはないだろう？我が宿敵よ」

「フツ、もちろん」

将征は顔に笑みを浮かべながら立ち上がる

そして再び地面を蹴りヘラクレスへと向かう

それを石斧を振り上げて迎撃の体勢にはいるヘラクレス

そして将征の剣よりも射程の長い石斧を射程入ると同時に降り下ろす

それを将征は剣を斜めにして受け流し返す刀で横薙ぎに切りつける

その一刀はヘラクレスが引き戻した石斧によって阻まれる

弾かれ反動を利用して反対側への一薙ぎそれを後ろに下がることのでかわされる

そして空いた距離を積めて三度激突する

ヘラクレスの攻撃は全てが一撃必殺と呼べるようなモノばかり文字通り一撃でもまともに食らってしまえばそれだけで戦闘不能になってしまう

対する将征の攻撃はヘラクレスの攻撃に比べれば軽いがその攻撃は的確に人体の急所を突いている

力で勝るヘラクレス

技で勝る将征

その攻防は目まぐるしく攻めと守りが入れ替わりその周辺一帯が剣撃と斧撃の嵐によって蹂躪される

だが流石英雄、徐々に自力で勝るヘラクレスが押していく

ヘラクレスを技を必要としない剛力は例え受け流したとしても身体にダメージは蓄積されるのだ

それが戦いに影響し徐々にではあるが拮抗していた攻めと守りにおいてヘラクレスの方が攻めに転ずる機会が増えていく

そんな中何とか食いついていく将征

それでも少しずつではあるが将征の身体には浅い傷が増えていく

そしてついに受け流しきれずヘラクレスの横からの一撃を食らってしまう

咄嗟に剣を盾にして防いだが身体が吹き飛ばされる

そして空中に身体が浮いてしまう将征

その好機を逃すまいと将征に迫るヘラクレス

だがヘラクレスが石斧を振り上げる瞬間、空中で身体が泳いだままの将征が剣を振るう

本来なら絶対に届くはずのない距離から振るわれる剣

「ッ？」

だが、その光輝く剣はその瞬間、刀身を伸ばしヘラクレスへと到達しヘラクレスに傷を負わせる

だが、何の支えもないところから繰り出された剣では戦いに支障をきたすような傷を作ることではできなかった

地面に着地した将征にヘラクレスが語りかける

「その剣の権能、最初はかのアーサー王の聖剣かとも思っただが違うな」

ヘラクレスが俺を静かに見据えながら呟く

「貴殿が殺めた神は、フェルグスだな、アルスター神話の英雄フェルグス、その剣はアーサー王の聖剣エクスカリバーの祖であるカラボルグだ」

ヘラクレスは確信のこもった声で言う

「かの魔剣の名前は硬い稲妻あるいは、煌めく剣という意味であり、虹の端から端まで伸び一振りで丘の天辺を三つも切ったという」

そしてヘラクレスは警戒した目付きでこちらを見据える

そうヘラクレスの言う通り、それがグリニッジの賢人議会に『光の聖剣』と名付けられながらも未だに何の神から篡奪したモノか分かっていない権能の正体

だがもうカラボルグによる奇襲は効かない、そしてこのまま肉弾戦をしてもじり貧、となれば……………

「ツム？」

俺はカラドボルグを消し新たな言霊を唱える

「来るは、荒々しき駿馬が引きし戦車、授からは嵐の源、それを
持つて悪き始祖竜を打ち破らん」

それが響くと何処からとも空から四頭の鎧に身を包んだ荒馬が引く
戦車が降りてきて将征の前で停まる

「さあ、ここからが第2ラウンドだ」

そう言うが早いか将征は戦車に飛び乗り四頭の荒馬の手綱を握り走
り出す

「くっ！」

そしてそのままヘラクレスへと突撃する

ヘラクレスは石斧を盾にして突撃を防ぐが吹き飛ばされる

「ならば……！」

ヘラクレスは叫び、手にしていた石斧を消し、その手に弓と毒のつ
いた矢を握り、今は宙を走っている将征達向けて毒の矢を放つ

その矢は寸分違わず四匹の荒馬の内一頭に吸い込まれるように向か
って行く

だが、矢が荒馬に当たる瞬間稲妻が走り矢を撃ち落とした

見れば戦車に乗る将征の周りには四つの光球と四つの風の渦が漂っ
ている

どうやら先程の稲妻は周りにある光球一つから放たれたモノようだ
そして、コレは将征が先日イラクで打ち倒した、神々の王であり最
古の『鋼』の英雄でもあるバビロニアの最高神マルドゥクから篡奪
したモノで、後に『大戦武装』と名付けられる権能である
そして始まった第2ラウンド

将征は戦車と四つずつある雷と風を使つたをヒットアンドアウェイ
戦法

ヘラクレスはそれを石斧で迎撃若しくは毒のついた弓矢による狙撃
戦況はまたも膠着状態に入り一進一退の攻防が続く

そんな中、セフィリア達にも動きがあった

将征と別れた後、被害が及ばない場所まで離れたところで三人の騎士が準備に入る

「来れ、クライスト」

「来れ、ディオスクロイ」

「来れ、エクセリオン」

それぞれの言霊と共にそれぞれの武器が現れる

セフィリアの手には刀身が黒く、柄にに手甲がついた、刀剣の中でも所謂サーベルと呼ばれる形状の剣が握られている

ナイザーの両手には黒いトンファーが握られている

ジェノスの右手には黒いグローブに手の甲の部分に金属がついたものがつけられている

「さあ始めましょう」

「おしっ！了解！さて久しぶりにやるか、ナイザーちゃんと付いてこいよ」

「良いからさっさと行くぞ、大将がまってんだ」

「分かってるって、んじゃあゝ祐里ちゃんここでお嬢と待っててねすぐに戻って来るから」

「おら！早くしろ」

「分かってるって、じゃあゝ行くぜえゝ」

ジェノスがそう言ってグローブの着いた右手を振るとその回りに生えていた太い幹の木が細切れになる

そして上から降って来る木の破片をナイザーが両手のトンファーで粉碎していく

そして彼らは森の中へと走りって行き同じ事を走りながら行っていくその姿は直ぐに見えなくなった

「さて祐里、コレからここら一帯に火避けの魔術を掛けるので手伝って下さい」

「…………それが西条さんの助けになるんですね？」

「はい、彼の最大の権能を使用するところら一帯が火の海になってしましますから、それを少しでも防ぐ為に必要なのです」「わかりました。お手伝いします」

「フフツ、ありがとうございます」

そして全ての準備が整い

上空に合図の閃光弾を打ち上げる

パーン、パーン

遠くの空に閃光弾があがる

(フウ、やつとか)

戦況はお互い決定打が打てず膠着状態が続いていたが今、将征が待っていた合図が届いた

それを見て戦車を降りる将征

それをいぶかしみながら見詰めるヘラクレス

「さて、そろそろ決着を着けようぜヘラクレス」

「……………、何を企んでいる？」

「別に準備が整ったつてただだよ」

「？」

俺の言葉に警戒するヘラクレス

そんなヘラクレスの前で、言霊を紡ぐ

自身の最大の権能を使うために

「今こそ我が身に、その呪わしき命運尽き果てるまで、高き天にまで届く天災を宿すものなり、されば我は求め訴えたり、喰らえ

その天災の牙を以て、我は我が身を捧げん」

言霊が唱えられる

そして将征の姿が変わる

身体が膨れ上がり背中からは翼が生え、上半身は逞しい男、下半身はとぐろを巻いた大蛇へと変わり

体長二十メートル程の怪物へと変わったのだ

「ヘラクレス、お前ならコレが誰から奪った権能か言わなくても分かるよな？」

「ああ、我が父に倒され、そして我が打ち倒してきた魔獣達の父である」

そうコレが将征の最大の権能、テュポーンから篡奪した『天災の化身』である

「本来、俺は関係ないんだが、この奪った権能せいか、お前さんには因縁を感じるんだよ」

「我もだ」

互いに笑みを浮かべながら正真正明最後の激突に備える

互いに消耗しあっている状態での最大の一撃を放つ準備をする

将征は空に向けて手をのばす、すると空は曇りだし黒い雲に覆われる
ヘラクレスも自身の最大の一撃を放つ為に石斧を構える

辺りが静まり返る

そして最後の一騎討ちが始まった

宙で羽ばたいている将征が空に向けていた手をヘラクレスに向かつて降り下ろす

すると黒い雲の中から直径十メートルを越す煙りを上げる赤い物体（火山弾）がヘラクレスめがけて墜ちていく

そしてヘラクレスもまた技を放つ 九つの斬撃

そして激突、結果は

第六章 魔王と英雄と権能と（後書き）

三毛猫ヤマトです

初の本格的な戦闘を書きました

権能の方も一応今主人公が持っているのは全て出しましたが

一応隠し球的な切り札はまだ残っていたりします

テュポーンの権能についての詳しい説明は次回になると思いますが、コレからもよろしく願います

設定の方も近々更新しますのでソチラもご覧になって頂けたら幸いです

m (_ _) m

第七章 決着と再戦の約束と帰還と

テュポーン

その背は星々まで届き、腕は世界の果てまで届く、その翼は太陽の光を遮り、目からは熱線を口からは火を放つ、手にした岩には炎を纏わして投げつける

このテュポーンの姿はテュポーンが火山を擬人化したモノであるからだとされている

更にテュポーンの産み出された理由はギリシャの最高神ゼウスが地母神ガイアの怒りに降れた為だとも、浮気ばかりするゼウスに腹をたてた妻である女神ヘラが産み出したともされ

この地母神ガイア、女神ヘラの二柱はどちらも大地の神でありテュポーンの誕生は大地の怒り（火山の噴火）を表したモノとも言える
西条将征が天災の神格であるテュポーンから篡奪した権能とはその火山としての権能である

密林の中に佇むクロノス所有の建物、今その建物が建っていた場所は地獄と化していた

大地に刻まれた数百数千の剣撃、斧撃の痕、周囲の森には火が回り、建物の前の広場を赤く照らす、だがその中心部の地面は挟れ火による灯りとは関係はなく真っ赤に染まっている

その爆心地とも呼べる場所から少し離れた場所に浅黒い肌の色をした男が横たわっていた

男の側には石の斧が転がっている

だが、その石の斧は刀身の上半分を失っており、失った刀身との接合部分は赤く熱を持っていてそれが砕かれた訳ではないことを語っている

そして、それを空中から見下ろすこの地獄の主、この灼熱の地獄を造り出した魔王

彼の姿はまさにこの地獄の主にふさわしい異形の姿だったが彼から放たれる覇気はまさに霸王にふさわしいモノだった

「我は敗れたのだな」

「ああ、俺の勝ちだ」

「妙な感じではあるが、コレは貴殿にとっては仇を討ったと言えるのか」

「どうだろうな？ だけど確かに戦う前には怒り狂っていた俺の中に
あるアイツの力が今は治まっているのは確かだ」

そう横たわる大男、ヘラクレスと将征が打ち倒し怪物テュポーンに
は決して浅くない因縁がある

ヘラクレスの父、ゼウスはテュポーンを倒し山の下敷きに封印し
た張本人であり、ヘラクレス本人も伝説で言われる十二の難業で倒
し殺した魔物達、ネメアの獅子、沼地のヒュドラ、黄金の木の実を
守るラドン、皆テュポーンにとっては自身の我が子なのだ

それを殺したヘラクレスはテュポーンにとっては我が子の仇その者
なのだ

「意外な形ではあるが因縁の決着と言うことか」

「まあ、代理人を通してって形ではあるがな、後は本人同士でやつ
てくれ、関係ない人を巻き込まないようにするのは付くがな」

「ハハッ君達からすればそうであろうな、だがかの巨神を相手には
それは流石に無理があると思わないか？ いくらまっつるわぬ神として
力が堕ちて身体が幾らか小さくなっていると言っても、それは戦っ
た君が一番よくわかつているのではないのか？」

「……………（汗）、やっぱり結果はつけなくて良いや」

「ハハッまあまずそんな機会があるかどうかすらわからんがな」

「出来ればズツと来ないことを願うよ」

将征は疲れたように頭に手をあてる

「だが今日ここで新たな因縁が生まれた」

その言葉に将征はヘラクレスに顔を向ける

「貴殿は我を倒した、つまり貴殿は勝利者、王者チャンピオンと言うことだ、我は消えるが、必ず蘇る、その時再び貴殿に挑む、次は王者に挑む挑戦者としてな」

その顔はまさに強者（難業）に挑む戦士のモノだった

「ニッ、ああゝその挑戦待ってるぜ、その時は王者チャンピオンとしてな」

将征はその言葉に王者の笑みをもって応える

そしてヘラクレスの身体が消えていく

「名を教えて貰えるか王者チャンピオンよ」

「西条将征だ挑戦者よ」

二人の間にはせつかく出逢うことが出来た強者との別れを哀しむ悲壮感はない

あるの今一度、再びまみえると言う、強者同士の誓いのみ

「フフッハハハハハハ」

そしてドチラともなく笑い会う二人の強者

「アッ、来るのは良いけど周りに迷惑かけないで来いよ」

「フッ、その辺りは挑戦者の礼節として弁えている」

ちやっかりした王者に挑戦者は笑みで応える

「そっか、……………それじゃあな」

「ああ、ではまたな好敵手ともよ」

そう言つてヘラクレスは完全に消えた

そして炎が消えた戦場に残ったのは王者チャンピオンと言う名の魔王

そして彼は勝利を手にした王者チャンピオンとして新たなベルト（権能）を手にする

英雄神ヘラクレス

彼は生まれて間もなく彼に力を与えようとした父ゼウスによって寝ている義母たる女神ヘラの母乳を飲まされる

そしてヘラクレスはヘラの母乳を飲むごとに身体が、力が強くなり、それにつれてヘラの乳を噛む力もまた強くなり

そしてそのあまりにも強い噛む力の痛みに目を覚ましたヘラによつ

て彼は突き飛ばされるがその時には赤子でありながら蛇を握り殺す程であった

女神ヘラは蛇と深い関わりの有る神である、そして古来より『鋼』の英雄と呼ばれる者達は蛇を、竜を倒し力を手にする、

日本の男神、須佐之男は八岐大蛇をほふって天叢雲剣を得る、『蛇』を殺して『剣』を得たのだ

竜ファブニールを殺害し不死身となる英雄ジークフリード

『竜』を殺して『不死身』となった

そして英雄ヘラクレスもまたその瞬間、女神ヘラ（蛇）を倒し力を得たのだ

天を支える程と呼ばれる剛力と不死身に近い身体を

そして、その肉体で数多の功業、栄光を打ち立てる

故にその名はヘラクレス、『ヘラの栄光』と言う意味である

西条将征が英雄神ヘラクレスから篡奪した権能である

合図の閃光弾を放った後、暫くして変化が現れた

急に黒い雲が空を覆ったのだ、明らかに自然に起こった現象ではないそれを見詰める四人の中でなぜこの現象が起きたの正確に理解しているの三人、もう一人もそのたぐいまれなる靈感でこの現象を引き起こしたのが誰か理解していた

「……西条さんですか？」

主語はない、だがそれだけで通じる

「……ええ、これは将征の権能によるものです」

そうこの現象は、彼らの主たる少年が引き起こしたモノなのだそして、この現象が起きたと言うことは、決着が近いと言うことでもある

西条将征の最大の権能『天災の化身』

コレは何も比喻ではない、文字通りこの権能は将征を天災に変える

のだ

テュポーンと言うな名の天災に
そしてそれは起こった、空を覆った黒い雲から煙を挙げながら赤い
物体が墜ちてくる

それはまるで世界を破滅させる天災のようだった

それが着弾、 そして衝撃

「ツク！」

「ツム！」

「ウオオ！」

「キャッ！」

凄まじい衝撃が四人の元に届いた

全員が衝撃に耐えはしたが全員がしゃがみこんでいる

「全員無事か？」

「ええ」

「大丈夫だぜ」

「な、なんとか」

ナイザーの問いにセフィリア、ジェノス、祐里が答える

「にして旦那もう少し手加減出来ないかね」

そう言ったジェノスの視線は将征とヘラクレスが戦っている森を向
いている

だがその森は先程までとは様子が変わっていた

森の木が凄い勢いで燃えているのだ

今になって祐里はなぜ火避けの魔術や呪術を使わなければならなかつたのか理解した

もし、火避けの対策をとっていなければたちまちにこの森は火の海
になっていただろう

「ですが今の衝撃、将征の攻撃に寄るものだけではありませんね」

「ああ、恐らく英雄神との攻撃の打ち合いになったな、この衝撃は
互いの攻撃をぶつけ合った結果だろう」

誰も主の心配をするものはいない

彼らは自分達の主の勝利を信じているのだ

そして、それは姿を表す、既に燃えるモノが無くなり弱まってしま
い火が消えかかって森の中から

決して深くはないが幾つもの傷を作りながらも彼らの王は帰還する

「将征！」

「大将！」

「旦那！」

「西条さん！」

それぞれが声を挙げる

そして呼ばれた本人はその声に笑みを持って答える

「
ただいま！」

第七章 決着と再戦の約束と帰還と（後書き）

三毛猫ヤマトです

やつとヘラクレレス戦終了です

なんかヘラクレレスの旦那との会話がどこぞの格闘漫画ばりのやり取りになって仕舞いました

キャラについてはご容赦下さい

後、テュポーンの言霊は奪還屋の親子の右腕を解放する時のモノをアレンジしたものです

これからまだ少し海外編を書いて、その後、恵那を出すつもりです
設定を加筆したのでソチラもどうぞご覧下さい

これからも頑張りますのでよろしく願います

m (— —) m

第八章 組織の忠誠と好好爺と恋愛模様と（前書き）

セフィリアのキャラが……

出来ればスルーでお願いします

第八章 組織の忠誠と好好爺と恋愛模様と

ドイツ

秘密結社クロノス本部

ギリシャ、イタリアに起源をもつクロノスではあるが時代の流れによつてその本拠地を移してきた

今現在でもギリシャ、イタリアに支部はあり、その中にはかつて本拠地と呼ばれた地も含まれている

そして、現在その本拠地をドイツに移している

そのクロノスの本部でも限られたモノしか入ることが出来ない一室で三人男女が会談をしていた

一人は現在最年少の七人目のカンピオーネ、西条将征

もう一人は彼、西条将征に忠誠を誓った彼の第一の騎士、セフィリア・アークス

最後の一人は秘密結社クロノスの大首領、ウィルザーク

「話はセフィリア達から聞いております、先ずはまつろわぬ神の脅威からこの国と民を守って頂きありがとうございます」

本来なら一世紀に近い年月を生きるウィルザークがまだ十代後半と言った風情の少年に頭を下げると言つのは可笑しく映るかもしれないだが、ことこの少年に関してはその常識は通じない

「頭をあげてください、俺は誰に強要されたわけでもなく自分の意思で、ただ自分の信念を徹しただけですから」

「貴方は立派な王だ、他の王の方々の多くはもつと自分本意に行動なされると言ふのに」

「俺も変わりませんよ、ただ俺のその自分本意な行動と言ふのが『力のない者を守る』と言っただけのことです、ハッキリ言つて俺はかなり我が儘ですよ、その自分の我を徹するためならその敵に対して容赦はしませんから」

「貴方にとってはそうであっても守って頂いた者にとっては決して

そんなことはありませんよ」

そんなウィルザークの言葉に少し照れたように頭を掻く将征

そんな将征の様子を口元に手を当てて「フフッ」と笑うセフィリア
そんな二人の様子を笑みを浮かべながら見詰めるウィルザーク

「将征さま」

ウィルザークの言葉に目を向ける二人

「此度の件で御身の持つ権能は四つとなりました、テュポーン、フ
エルグス、マルドウクそしてヘラクレス、今や貴方さまは他の先達
の王の方々にも全く劣らない力を持つておられます」

ウィルザークは厳肅な雰囲気で続ける

「貴方さまの力は貴方さまが打ち倒された神の名がその証明となり
ましょう」

ウィルザークが一息いれる

「将征さま、我らクロノスを含めたドイツの全ての魔術結社はあな
た様にこの国の全て魔術結社の主たる盟主になって頂きたいと思っ
ております」

ウィルザークは真剣な瞳で将征を見詰める

「どうか我ら盟主となって我らをまつろわぬ神の脅威から守って頂
けないでしょうか？我らの盟主となって頂けると言うのなら我らド
イツの魔術結社全ては、貴方さまにとっては微々たるモノでしか
ないでしょうが持てる力の全てを持って、貴方さまの剣となり、盾と
なり貴方さまに害なす者と戦いましょう」

ウィルザークは王に対して臣下の礼をするように膝を着き頭を垂れる

「……………貴方々にとってまつろわぬ神というのは抗うことの出来な
い脅威（暴力）ですか？」将征の言葉に顔をあげるウィルザーク、
そして彼は感じていたこの問いこそが今後を左右するモノであると

「……………はい」

ウィルザークは万感の思いを込めて答える

「なら俺は貴方々が求める限りその脅威（暴力）から貴方々を守り
ましょう」

そして将征はその思いに応える

「日本語で『武』とは『戈』を『止』めると書きます。そして俺は武人です、ならば貴方々が求めるのなら俺は貴方々をまつるわぬ神（戈）から守り（止め）ましょう」

それは以前セフィリアと祐理に対して口にしたモノだった、将征はその自身の信念を三度口にした

そしてその言葉を聞いていた他の二人は再び膝まづき頭を垂れるこの瞬間こそが西条将征がクロノスを含めたドイツの魔術結社全ての盟主となった瞬間であつた

「ところで」

その後、将征に言われ立ち上がった二人の内、ウィルザークが声をあげる

「将征さま、セフィリアとの関係は如何ですか？」

その言葉の意味に気付いたセフィリアは顔を真っ赤にしてウィルザークに詰め寄る

「お、お祖父様？」

「どうですか？ 内の孫娘を嫁に？」

「俺は権力等で結婚しようなどとは思っていませんよ、寧ろ望まぬことを理不尽な力によって強いられる者を守るのが俺の本懐であるのにそれを俺がやるわけがないでしょう？ ですがそれも世の中には必要な事だと俺も理解はしていますよ。ですが『それでも』と言うときは自身の信念を徹しますがね」

「フム、確かにそうですね、ですがそれは『望まぬ相手との結婚を』と言うことですか？」

「ええそうですね……」

「望まぬのお？」

そう言つてウィルザークは自身の孫娘、セフィリアに目をやるするとセフィリアは顔を赤くして下を向いてしまった

「ウィルザークさん、あまりお孫さんを苛めないであげて下さい、困ってるじゃないですか」

「ホホッ老い先短いこの身ゆえ出来るならば曾孫が見てみたいと思いますてな、少し急過ぎましたな、ですがどうですか？将征さま、貴方さまから見てセフィリアは？女として魅力を感じたりしませんかな？」

ウィルザークは好好爺然とした顔で尋ねる

セフィリアもこの時ばかりは顔をうつ向かせながらも目は将征の方を向いて耳を澄ましていた

「セフィリアは同年代の異性から見ればとても魅力的な女性だと思いますよ、性格も良いですし、事実学校でもかなり人気が高いですからね」

その言葉を聞きセフィリアは更に顔を赤くしうつ向いてしまいウィルザークは満足そうな笑みを浮かべている

「そう言えば、あの日本人の少女、あの子とはどういったご関係で？」

祐理のことである

「あの子は学校の後輩で、前に日本の呪術組織が俺が本物のカンピオーネであるかどうかを確かめるために助力を要請した霊視の巫女の者ですよ」

「そうですか、ですがなぜ一緒に？」

「彼女が組織など関係なく自分の意思で俺を手伝いたいと言つので」「ホゝ自分の意思で、慕われておりますな」

「いやそう言うことでは無いと思うのですが……」

「いえいえ、それも貴方さまの人柄故でしょう、おっと話が長くなつてしまいましたな、お疲れでしょう。ゆっくりと部屋でお休みください、ああゝセフィリアには話があるから少し残ってくれ」

その言葉でこの場はお開きとなり将征は使いの者によって部屋まで案内されていった

そして部屋に残ったのはウィルザークとセフィリアの二人

「さて、セフィリア単刀直入に訊く、将征さまのことをどう思っている？」

「どうとは？」

「恋愛感情を持っているのか？と言っことじゃ」

「それは……」

返答に窮するセフィリア

「あの方もあ言っておられたし、ワシも魔術結社の長として出はなく祖父としては、お前に望んだ相手と一緒に頑張って貰いたいと思う」

「お祖父様……」

「その上で訊く、セフィリア、お前は将征さまのことをどう思っている？」

「わ、私は……」

またしてもうつ向いてしまうセフィリア

「……直ぐに答えを出せとは言わん、だがあの方の側には他にも女性がおるんじやろう？しかもアチラ日本では始めて生まれた自国のカンピオーネに対してどう接すれば良いか四苦八苦しているようじやが、最近では愛人を送ろうと言う動きもあると聞く、まああの方には逆効果のような気もするがのお」

愛人と言う言葉に顔を挙げるセフィリア

「愛人？」

「一番古典的ではあるが確実方法でもある、特にお前達の年代の者にはな、まあだからといって誰にでも有効な手段とは限らんがの、じゃが望んでにしろ望まぬにしろ、あの方なら送り込んできた組織に対して悪感情を持つであろうが送り込まれた者に対しては大切に扱うじやろう？」

ウィルザークはセフィリアに問いかける

「望んでではないのならあの方の信念によって、望んでならあの方なら拒むまい、本当に愛人として扱うかは別じゃがな」

セフィリアはウィルザークの言葉に何も言えない

「セフィリアよ、お前があの方を憎からず思っているのはわかる、じゃがだからこそ早めにその気持ちにケジメをつけないければならん」
「騎士としてあの方に仕えるのか？、それとも騎士としてだけでなく女としてもあの方の側に居続けるのか？、ワシはお前が出した結論を咎めたりはせん、じゃから後悔だけはするな、お前が自分の意思で自分の想いに対し後悔のない答えを出すんじゃ、心配するな、あの方ならお前の全てを受け止めて下さるじやろつて、話は以上じや下がって良いぞ」

その後、セフィリアは部屋を退室し廊下を歩きながら先の祖父に言われたことを考えていた

「……………私の想い……………」

セフィリア以外に誰もいない廊下にその独白が響いた

第八章 組織の忠誠と好好爺と恋愛模様と（後書き）

三毛猫ヤマトです

セフィリアさんのキャラが変わってしまいました

もう恋する乙女に近い感じで…

ウィルザークとの家族関係はオリジナルです

セフィリアと将征の関係を後押しするならやはり身内のほうが良い
気がして家族にしてみました

こんな作品ですがコレからも頑張って精進して良い作品に出来るよ
うに頑張っていくのでよろしくお願いします

m () m

第九章 見舞いと巫女の過去と約束と（前書き）

時間が掛かったわりに内容がうすく進んでません

m (— —) m

第九章 見舞いと巫女の過去と約束と

今、将征はクロノスの系列のホテルに泊まっている

それも大物政治家や外国からの主賓等が客層に入るような超高級ホテルである

しかも将征が泊まっているのはそのホテルのスイートルームである
クロノス側からは将征に更に上のクラスの部屋を用意するとも言ったのだが将征がこれに対しては丁重に断りを入れ

本来なら「スイートも」つと将征は考えたのだが、クロノスの立場的にもしクロノスの系列のホテルで王がツイン等に泊まった等となればクロノスは他の結社に顔向けが出来なくなるだろうと思いスイートで妥協（普通は逆だが）しているのだ

そしてそれは将征と共にドイツを訪れた祐理も同じであった

ここドイツでも祐理の名前はそれなりに知られているのだ

原因は数年前にバルカンの魔王ヴォバン侯爵が行なった『まつろわぬ神』を将来する大呪の儀 神を将来させるために集められた数十人の巫女達、儀式を終えた後、彼女達の三分の二が正気を失い、心に深い傷を負ったという

その中でも儀式を無事に終え、最もすぐれた巫力を見せたのが祐理なのだ

そう言ったこともあってここドイツでも祐理の名を知るものは少なくはないのだ

そして将征は今、その祐理の元を訪れていた

急に決まったドイツへの渡航、更に着いたそこから直ぐに神具の元へ向かい、そこでの霊視、果てには休むまもなく『まつろわぬ神』と王との戦いなど1日にも満たない間の強行軍に流石に疲れたのか戦いの後緊張の糸が切れ直ぐに倒れるようにして寝てしまったのだ
そんな祐理の元へ将征は見舞いもかねておとずれたのだ

「体調の方はもう大丈夫なのか？」

「ええ、休ませて頂いたお蔭でよくなりました。ですが私などの為にこの様な部屋を用意して頂いて、見舞いにまで来て下さるなんて見に余る光栄です」

「そう言うのは無し、君は俺に力を貸してくれた、そのせいで君が倒れたのなら俺に責任がある、それにこの部屋を用意したのはセフィリアだ、それについてアイツに言ってやってくれ」

将征の言葉を聞いて一瞬驚いた顔をしたがその後には穏やかな表情を浮かべながら言った

「はい、そうします」

そんな祐理に対して将征はここ最近抱いていた疑問をぶつける

「……………なあ祐理、君は何で俺に協力してくれるんだ？」

将征の突然の問いかけに驚いたのかキョトンとしている祐理

「『王の要請は絶対だから』、これについては俺も知っている、魔術師・呪術師・巫女等にとって王の要請、命令は絶対だって、ただ君は自分から俺を手伝いたいと言ったね」

「それは……………」

「祐理、特に君にとって俺達、王と言うのは恐ろしい存在なんじゃないのか？」

ここで一呼吸いれる

「数年前の儀式について、セフィリアから聞いたよ」

そう言っただけで将征は祐理に目を向ける

「その時儀式に臨んだのは君を含め三十名弱、そしてその内三分の二が儀式後に精神に重大な障害を引き起こし、発狂して正気を失ったと訊いた」

「今回のことだってそう言った危険がない訳じゃない、もしかしたら『まつろわぬ神』との直接的な戦闘に君は巻き込まれていたかもしれない、なのに何故君は俺に協力してくれるんだ？」

将征の疑問、祐理にとって王とは恐怖の代名詞であろう

いきなり家族と引き離され、行った儀式、それを終えてみれば周りには一緒に儀式に挑んだ巫女の内、二十名近くが発狂しており、一

歩間違えば自分もそうなっていたかもしれないと言う恐怖を目の前で味わったのだから

それなのに、祐理は同じ王である自分に自分から協力したいと言うのだ、もしかしたら前に味わった以上の危険があるかもしれないと言っのに

「……………西条さん、私と初めて会った時のことを覚えていますか？」
その言葉に将征はいぶかしむような感じに祐理をみる

「私はあの時のことを良く覚えていますが、確かにあの時、私は始め怖くてたまりませんでした、あの頃の私にとって王とは恐怖の象徴のような存在でしたから」

祐理は目を閉じながら語り出す

「ですが、あの時、西条さんの話を訊いて感動しました。私にとつての王とは傍若無人で自分の欲の為に行動なさり、誰も逆らうことの出来ないそう言う存在だったからです」

そこで祐理は目を開けて将征を真っ直ぐに見詰める

「でも、将征さんは守ると言ってくれました。『自分は弱い者や力のない者を理不尽な力から守るのだ』と、あの時は本当に感動しました。この様な立派な王も要るのだと」

祐理はそう笑みを溢しながら言う

「それから、度々ご一緒させて頂きお話をさせて頂く内に純粹に思っただのです。」

「この方のお手伝いがしたいと、西条さんの『誰かを守る』というあなた様の『思い』の手助けしたいと……………」

「西条さん、改めてお願い申しあげます、どうか私にあなた様のその志を、思いを貫く為のお手伝いさせては頂けないでしょうか？」
祐理は恭しく頭を下げて言う

「私にできることなどたかが知れているでしょうが、それでもあなた様の力になりたいのです」

「顔を上げてくれ祐理、そう言うことは本当ならコチラからお願いすべきことなんだから」

「では……」

「コチラこそ頼むよ、ありがとう祐理」

「いえ、若輩者ではありますが精一杯やらせていただきます」「んゝゝゝん、その前にその口調何とかならない？何だか畏まって、他人行儀な感じがするんだよ」

「え、そ、そうでしゅうか？」

「まあゝ祐理の場合は素でその口調なんだろうけど……責めて苗字にさん付けは止めないか？」

「え、あ、ええと、ま、将征さん？」

「うゝゝん、出来ればさん付けも止めて貰いたいと思ったんだけど多分君の場合は性格というか育ち方から来るもの何だろうから仕方がないね」

「済みません、男性の方をその様に呼ぶのは……」

祐理は申し訳なさそうに頭を下げる

「良いよ、気にしないで、だけどこれからは下の名前で頼むよ」

「はい、将征さん」

祐理は笑顔で答える

「………祐理」

「はい？」

「もし君がまた数年前の儀式の様な事に巻き込まれたら、俺が君を守るよ」

「ッ！」

「相手がヴォバンの狼じいさんだろうが、他の王さまだろうが関係ない、俺が君をその理不尽な力から守ろう」

「っ、はい」

祐理はうつすらとだが目尻に涙を貯めながらも笑いながら将征に返事をする

将征はこの表情を見た時に思った、この娘を絶対に守ろうと

さつき自分でも言った通り他の魔王だろうが何だろうが相手でも一歩も引いてやるものか、絶対に守り徹す！と

「それでも俺だって王さまの一人はだからな、自分に忠誠を誓ってくれた騎士や手助けてをしてくれるって言う協力者に危害を加えるって言うならそいつを全力で倒す、それが王として勤めだと思っからさ」

将征はそう言っで祐理に笑いかける

まるで後付けでそれらしい理由を付けただけの様な感じもするが本人は至って真面目である

「ありがとうございます、将征さん。そう言っで頂けて嬉しいです」
「この場合、どういたしまして言うべきなのかな？まっとにかく笑っでくれたて嬉しいよ、暗い顔をしているよりその方がずっと良いからね」

「あ、ありがとうございます」その言葉に顔を赤くしながら答える祐理

その後、暫く二人で話をしていると

「祐理、将征が何処に行ったか知りませんか？」

セフィリアが訪ねてきた

「ああ、俺ならいるぞ」

「ここに居たんですか、探しましたよ」

「悪かったな、書き置き位しておくべきだった」

将征は済まなそうに言う

「いえ、直ぐに見つかりましたから良いのですが、もし外出する際は、私かナイザーやジェノス辺りに声を掛けてくださいね」

「ああ、分かった。ところで何の用事だったんだ？」

「そうでした、実は正式にあなたがドイツの盟主に成ったと言うことで、イタリアの方にも挨拶をっと言うことになったんです。」

「イタリアに？」

「はい、あちらは以前クロノスも本部を置いていた時期もありましたから、あちらのクロノスの支部に顔を出しながら、古くから親交のある魔術結社の者に挨拶をしておこうっと言うことになったんです」

「…………俺に確認を取りに来ると言うより既に行くことが確定しているような気がするんだが？」

「ご心配なくご家族の方には連絡済みです」

「ちよつと待て！おかしいだろ何でいつの間にか確定したと言うことで話が進んでいるんだ？」

「大丈夫です、新年までには日本に帰れますから」

「俺の話、全然聞いてないだろお前」

そんな風に二人がやり取りをしている間、祐理はセフィリアの言った言葉の一つに驚いていた

「あ、あの〜」

「ん？」

振り向いた二人に祐理は恐る恐ると思った感じで尋ねる

「セフィリアさんが先程言っていた盟主と言うのは？」

「ああその事ですか、実は今回の『まつろわぬ神』の事件で神、それもあのヘラクレスを倒したと言うことでドイツの魔術結社全ては将征にドイツの盟主になって欲しい願い、将征がそれを承諾したんです」

「それじゃあ」

「将征は名実共にドイツの魔術結社全ての王になったと言うことです」

祐理が将征に目を向けると

「まつそう言うことだな」

祐理は驚いて一時思考が停止しているようである

「とにかくそう言うことなので明日にはイタリアへ向かいますから準備しててください」

「分かったよ、仕方がないピザでも楽しみにしてるか」

「ピザですか？」

「美味しいんだろイタリアって」

「まあ〜そうですね、分かりました。アチラに連絡しておきましょう」

「そう言う意味で言ったんじゃないんだけどな」

「そう言うことは、気にしなくて良いんですよ、あなたは」

「うーん、まあとにかく明日の準備をするか」

そう言うて将征は座っていた椅子から立ち上がる

「それじゃな祐理」

「あつは、はい」

呼ばれてからようやく復活し弾かれるように返事をする祐理

そして将征とセフィリアは、二人連れだって祐理の部屋を後にした

祐理の部屋を出た後には

「祐理の部屋で二人で何をしていたんですか？」

「いや、別にただあの後直ぐに倒れるように寝てたからな、見舞いに行ってたんだよ」

「そう…ですか…」

「どうかしたのか？」

「いえ、何でもありません」

「？」

第九章 見舞いと巫女の過去と約束と（後書き）

三毛猫ヤマトです

前回から時間が空いたわりに内容もうすぐ進んでいなくて済みません
今回は祐里のフラグ強化を進めてみました

何だかあのまま書き続けるとセフィリアさんだけで祐里とかが空気に成ってしまいそうだったので（汗）

今回はイタリアです

イタリアに行くの良いながら多分エリカやリリアナには会わないと思います

期待していてくれた方

スミマセンm(――)m

エリカには間接的な噂を護堂に伝えて貰うつもりなので

直接は会わない方が良いと思いますそうになりました

ですが、一応何人が重要キャラは出すつもりです

これから頑張りますのでよろしく願います

m(――)m

第十章 ネコと狼と会談と（前書き）

かなり遅れてしまいました
すみません

第十章 ネコと狼と会談と

イタリアのある大通りに面したレストラン、そこは天気の良い日は外に椅子やテーブルを出して屋外でも食事が楽しめるレストランである

その屋外レストランのテーブルに座っている一人の日本人の少年、西条将征は注文した料理と人を待っていた

注文した料理は将征自身がイタリアで食べてみたいと言っていたピザ、人とは現在クロノスの数あるイタリア支部の内、本拠地となっている場所と連絡をとるために離れたセフィリアと御手洗いのためにこの場を離れた祐理である

セフィリアは連絡で祐理は身だしなみ辺りで手間取っているのかなかなか帰って来ない

将征はそんな二人と料理を珍しい外国の風景を見ながら待っていた（……………イタリアでは野良猫が車の上で寝るのか？） 偏見です、イタリアだからと言うことは絶対にありません

将征の視線の先にあるのは、車の上で丸くなっている猫であるその猫は通りに停めてある車のボンネットの上で寝っ転がっている、目が細く笑っているのか寝ているのか分からないよう顔をしたシロネコである

（見ていると和むんだか、何か変な気配を感じるのは気のせいかな？）そんな風に周りの景色や猫を観察していると祐理が帰ってきた

「遅くなって申し訳ありません」

祐理は申し訳なさそうに言って席に着く

「気にしないで良いよ」

将征は祐理にそう返した

「セフィリアさんはまだなんですか？」

「ああ、でもそろそろ来るだろう」

将征達は飛行機でイタリアへ入りその後お昼時と言うことで将征が

言っていたピザを食べることになり現在に至るのだ

因みにナイザーとジェノスは別のテーブルについて護衛をしている、実際には将征に護衛など必要ないのだが、強いて言えば見知らぬ土地であると言うことで不便があるからと言うくらいであろう

そしてしばらくすると電話を終えたセフィリアが戻ってきた

「遅くなりました」

そう言うセフィリアに将征は先程の祐理に対してと同じように返してから訊いた

「それで何かあったのか？」

「いえ、ただコチラの結社の長の方々との会談について打ち合わせの様なものです」

「そうか、そう言えばこの国の王さまは今ここには居ないんだろ？」

「ええ、この国の王、サルバトーレ卿はどうやら行方不明らしいんです」

「「行方不明？」」

将征と祐理は同時声を挙げる

それはそうである、神殺しの魔王ともあろう者が行方不明と言われればそれほどの何かしらの『まつろわぬ神』等との戦いによるものかと勘繰りもする

「ああ、いえ、そのサルバトーレ卿は『剣の王』と言われるイタリヤ最強の騎士であることには疑いはないのですけど……人格、メンタル的な面に関してはその……」

珍しくセフィリアが困ったつと言う表情で言葉を選ぶようにして言う

「怠け癖と言うか、気まぐれと言うか、細かいことは気になさらない豪快な方と言うか……」……本当に言葉を選んだのだろうか？

「ああ、分かった、だいたい理解したから説明は大丈夫だ」

「そ、そうですか？」

「ああ、つまり行方不明と言うのは戦いとかによる生死不明とかじやなくて、そのサルバトーレ卿の人格によるものと言うことだな」

「え、ええはい、まあ、その通りだと思いますよ、多分」

「大丈夫なのか？その人」

「まあ、人格等に多少問題はありますが王として役目はキッチリとこなされていますからね」

「やることはやるってことか」「いえ、サルバトーレ卿はただ『まつるわぬ神』、強者と戦いたいただけなんです」

セフィリアは苦笑しながら答える

「……………なあ王さまってそんな奴しかいないのか？」

将征の脳裏にはかつて出会い戦ったバルカンの狼王のことを思い出していた

あの時、将征はトルコで二柱目の神殺しを行った直後でやって来たヴオバン侯爵とやりあったのだ

何故か二人の王は出会った当初からお互いに対して敵意を剥き出しに会話をしていく内に戦うことになった

その時ヴオバン侯爵は自身の権能『貪る群狼』によってその姿を変え、将征も自身の権能『天災の化身』で姿を変え、さしずめ怪獣大決戦の体を表したのである

将征は知るよしもないがヴオバン侯爵が最初に殺した神はギリシャの太陽神アポロンなのだ、そして将征が最初に殺した神は同じギリシャの怪物テュポーン、互いに自身の権能に引つ張られ敵意を持つにいたったのだが、将征はヴオバン侯爵が権能を篡奪した神を知らず、ヴオバン侯爵もその時点ではテュポーンを殺し新たに王となった者がいるとは知らなかった、ゆえに互いに理由はわからないが何故か相手が気に入らない、と言うか「アイツは敵だ」と感が言っているっと言う感じに敵意剥き出しの戦闘をはじめってしまったのだ

結果は互いに因縁のある権能だけを使用しヴオバン侯爵は眷属たる狼達を呼び出し、将征は炎と雷を操り対抗したが、戦いの影響で地割れ、地盤沈下が起こってしまいその影響で互いの姿を見失いそのままうやむやになってしまったのだ

将征は、あの時の自分は冷静ではなかった、感情が権能に引つ張られたと自覚しているし相手もそうであろうと考えているのでとやか

く言つつもりはないが祐理のことは全くの別問題であり周りから聞いた話等から考えて傍若無人の戦闘狂という感じだろうと当たりをつけている

「ええと……………」

セフィリアの頭に浮かんだ王達は、江南の羅濠教主、アレキサンドリアのアイーシャ夫人、コーンウォールの黒王子なのだが、どの王も一癖も二癖あるような方ばかりで何も言えない

「は！、アメリカのジョン・ブルート・スミス氏はロサンゼルスに住民を邪術師から守っていることで有名ですよ」

まさに、彼が居たつと言うような表情で答えるセフィリア

「へえ〜どんな人なんだ？その人は」

「ロサンゼルスを暗躍しつついる邪術師の組織『蠅の王』からロサンゼルスを守っている方で『ロサンゼルス守護聖人』とも呼ばれている」

「まともそうな人がいてよかったよ…………あれ？ジョン・ブルート・スミス？それって偽名じゃないか？」

そうジョン・ブルート・スミスの内、ジョン・スミスとは身元不明死体に使われる日本で言う『ななしのこんべい』に相当する呼び名だ

「ええ、ジョン・ブルート・スミス氏は人前に現れる時は仮面を被り黒いケープを羽織った姿をなさっていてその正体は協力者の中でも一握りにも満たないとか」

「仮面ラダー？」

つい将征は石ノ森章 郎原作の特撮の歴史にその名を刻んでいる名シリーズの作品名を言ってしまった

「まあ〜そんな感じですね」

言い得て妙である

仮面を被り人々を守る男、日本に住む者なら殆どの者が彼らの名前を思い浮かべるだろう

「まあ〜何かしら事情があるんだろう、社会的なこととか何かで」

将征はその辺は詮索するべきでないと判断した、顔を隠しているの

には恐らく理由があるのだろうしやっていることは立派なことなのだから別に構わないだろうと言う考えからだ

「お！来たな」

そんな話をしている内に頼んでいたピザがやって来た

「この後、会いに行くんだろう？」

食事の合間に将征は尋ねる

「ええ、この後、予約したホテルに向かいそのホテルで会談です。

あ、部屋はロイヤルスイートですから」

さりげなく言うセフィリア

「え」

「結社の長を呼び招くのですから当然です」

将征はそこまでしなくてもっと思ったがセフィリアが言うことももっともなので今回は仕方ないと諦めた「何度も言うが普通は逆である」

そして昼食を食べ終わった将征達はナイザーの運転するリムジンに乗ってホテルに向かった

ホテルの最上階に位置するロイヤルスイートルームに将征達が訪れた時、四人の先客がいた老人が一人と精悍な顔つきの男性が一人と青年と呼んで差し支えない者が二人である

「お初にお目にかかります、王よ、お会いできて光栄です。私は先日『赤銅黒十字』の長となった者です。どうぞお見知りおきを」

「コチラこそ西条将征です。コチラの世界に関わって日が浅いので至らない点があるかも知れませんがどうぞよろしく願います」

正に騎士と呼ぶにふさわしい対応で挨拶をする青年、『赤銅黒十字』の長に頭を下げた答える将征

「はじめまして、西条将征、お会いできて光栄です。私は『百合の都』の長を務めている者です。どうぞお見知りおきを」

「わしは魔術結社『雌狼』の長をしている者です。どうぞお見知りおきを」

それに続いてもう一人の青年と老人が将征に挨拶をする

それに挨拶を返した後、最後に残る男性が将征に挨拶をする

「お久しぶりです、王よ」

「ええ久しぶりですね。ベルゼーさん、半年ぶり位ですか？」

「ええ前にお会いしたのは半年前にドイツを訪れた際ですからね」

その男は武闘派である秘密結社クロノスの騎士の中でも槍を極めた、最強と呼ばれる槍騎士、ベルゼー・ロシュフォールその人であった

第十章 ネコと狼と会談と（後書き）

三毛猫ヤマトです

前書きでも書きましたが更新が遅れてしまつて申し訳ありません
更に二学期が始まるので更に更新速度が落ちると思われます申し訳
ありません

これからよろしく願ひします

内容についてはベルゼーの旦那さんに登場してもらいました

好きなんですあの人、現役の時の番人で一番最初に登場してグング
ニルの一突きがかつこよくて出してしまいました

後はシロネコですかね

再度黒猫を読み返してみても彼？の存在を思い出し、衝動的に出して
しまいました

今後も日常や戦闘などで関係ないのに現れるかもしれませんがその
辺はスルーして貰えると幸いです

これから遅れると思いますが完結を目指して頑張りますのでよろ
しく願ひします

m (— —) m

追記

近日中に設定の方に将征の権能とベルゼーとシロネコの掲載する
と思いますのでソチラもよろしく願ひします

第十一章 邂逅と決闘と評価と

「つ、疲れた」

将征はリムジンのシートに身を沈めながらそうこぼす

「『疲れた』じゃありませんよ、見ているコッチの身にもなつてく
ださい」

「本当です、いきなり王同士で争うなんて……」

つと将征に対してセフィリアと祐理が口々に言う

王同士の争い、それはつまりは、二人以上のカンピオーネが互いに
争ったつと言うことだ。その内の一人はもちろん現在シートで休ん
でいる西条将征である。そしてその相手役とは『剣の王』として知
られるサルバトーレ卿だったのだ

事件の発端はホテルの最上階でイタリアの魔術結社の長達やベルゼ
ー達と会談をしている最中に現れた、だがその現れた人物こそが現
在絶賛行方不明中だったイタリアの王、カンピオーネであるサルバ
トーレ・ドニその人であったのだ

イタリアの王のいきなり来訪、これには傘下であるイタリアの魔術
結社の長達もあのベルゼーでさえも驚いた、それに現れるや否やそ
の者達への挨拶はソコソコにサルバトーレは真っ直ぐ将征の目の前
までやって来たのだ

王同士の邂逅、これにはそれまでサルバトーレに質問をかせねてい
た周りの者達も、いきなりの来訪に驚いていた者達も皆一斉に黙り
こむ、そして会話がなされる、最初は普通に挨拶をしお互いが噂の
本人であることを確認し合い軽い自己紹介等を行い、その後はとり
とめのない普通の会話が續く、内容としては、サルバトーレが自分
が今までどこに行っていた等世間話の範疇である

因みに何をしていたかというところある島で釣りをしながらビールを飲
んだりとバカンスを楽しんでいたらしい、だがそこへ新たに誕生し
た七人目の王、カンピオーネがイタリアにやってくると聞いて会い

に来たのだと言う

世の人々が見ればただ世間話をしているだけの普通の男性の二人組だが、だがそれを今見ている周りの者達としては気が気ではない状態なのである

本来ならこの二人の王の邂逅は望むべきことなのだが、サルバトール・ド二と言う人物の人柄を知る者達としては、バカンスをしていたところを自分からやって来たと言うサルバトールに対して嫌な予感しかないと言うのが本音であった、そしてその予感は見事に的中してしまったのだった

世間話していた二人だったが、いつの間にかサルバトールが剣を取り出して「軽く戦おう」と言い始めたのだ、これにはさっきまで黙って二人のことを見ていた魔術結社の長達も慌てて止めようとするがサルバトールはそんなことを聞く筈もなく、果てには町中では戦う気は無いと言う将征が「お互い剣に関する権能を持っているなら広い場所で剣による一本勝負をしよう」と言い出したのだ

これには周りの者達は勿論サルバトール本人でさえも驚いたようだがまさか『剣の王』とまで言われる最強の騎士の王に剣で勝負を挑むとは誰も予想してはいなかった、だが次の瞬間にはサルバトールは大声で笑いだしその申し出を承諾したのだ、そして今その決闘を終えて将征達は今夜泊まるホテルへ向かっているところなのだ

「だけど俺とサルバトールが本気でやり合ったら決着が着く前この辺り一帯が瓦礫の山になるぞ」

「ですがだからと言ってあの『剣の王』に剣で一騎打ちを挑むなんて・・・」

将征の言葉にセフィリアがまくし立てるように返す

「だが結果的に被害は小さくてすんだのも事実だ、以前、大将とヴオバン侯爵が争いになった際には、100mにも渡る地割れと地盤沈下が起こっている。それに比べ今回は闘技場の地面に斬撃の痕が残った程度、同じ王同士の争いとして比べれば今回の被害は奇跡に等しい位だ、それにこれで大将の力は証明することも出来た」

そんなセフィリアにナイザーが宥めるようにして語りかける

「ですが・・・」

「まあまあ旦那だってお嬢の言いたいことは十分わかってるって」

ジェノスの言葉を聞いてセフィリアは将征に顔を向ける

「・・・はあ、分かりました、ナイザーが言うことも事実ですしね、ですがこの様なことはこれっきりにして下さいね」

「ああ、善処するよ」

「絶対につとは言ってくれないんですね」

「・・・俺が無茶する様な相手は神さまか王さま位だからな、そんな奴ら相手じゃ安請け合いは出来ないさ」

そう将征は苦笑する

「にしてもスゴいですよ旦那、あのサルバトーレ卿と剣で引き分けるなんて」

ジェノスが興奮した面持ちで言う

「そうでもないさ、剣術では終始押さればなしたし、引き分けられたのは剣の性能のおかげだよ」

「それでも結果は引き分け、あのサルバトーレ卿を相手に、これは十分な結果ですよ。それに最後のアレ！スゴいじゃないですか、俺全然見えなかったスよ。アレって日本のサムライの技ですよ？俺デレビで見たことありますよ」

将征はジェノスの言葉に苦笑で応える

「ですがあれはまだ未完成なんでしょう？」

「「え！」」

セフィリアの言葉に祐理とジェノスは驚きの声を挙げる

「そうなのですか？」

「ああ、実はまだアレは完成じゃないんだよ」

「でもアレでも十分じゃないですか、あの『剣の王』から一本取ったんですから」

「イヤ、アレじゃまだまだだよ。アレはあの権能を手に入れた時から考えていてそれからずっと練習をしていて、最近やっと形にはな

つてきたけどとても完成とは言えない」

将征のその言葉に祐理とジェノスは本人がまだ技の出来に納得していないことに驚き、さらにもし完成したらどうなるのかと考えていた

「そろそろホテルに着きやすぜ大将」

そこへ運転席からナイザーの声が響く

「ふう〜やつと休めるな、そう言えば明日からはどうするんだ？」

「目的のイタリアの王と全てではありませんが魔術結社の長達への顔合わせは済みましたからね明日は一日休んで明後日には帰国と言うことに成ると思いますよ」

「そつか、じゃあ〜あつちに着くのは丁度クリスマスイヴ前か」

将征のそんな呟きが溢れるなか一行を乗せたリムジンはホテルの前に停まり運転をボーイに任せて一行はホテルの中へと消えた

「これが西条将征殿の力つと言うわけですかな」

「ええ」

「まさかあのサルバトーレ卿に剣で引き分けるとは・・・」

「彼が間違はなく本物の『王』であるつと言うことの証明でしょうな」

将征とサルバトーレが争った闘技場、そこには三人の男の姿があった、彼らは今日将征と会談した魔術結社の長達である

「グリニツジの賢人議会が掴めなかった西条将征の二つ目の権能の正体がアルスターの英雄からのモノだとは思いませんでしたかね」

「グリニツジの賢人議会が『光の聖剣』と名付けた権能でしたね」

その正体を知ってみればこれほど相応しい名もありませんな」

「たしかに、英雄フェルグス、一国の王子でもある彼が振るつたと言う『魔剣カラドボルグ』は『硬い稲妻』、『煌めく剣』と言う意味を持ち、かの最強の『聖剣エクスカリバー』のウェールズ名『カ

ラドヴルフ』の語源で元となったともされる王の剣、それを造り出す権能にこれほどぴったりの名はない」

「とても知らずに付けたとは思えない出来ですな」

「ええ、そして剣の性能も神話の通り、流石に虹の端から端までは無理なようですが」

「ですが西条将征殿が見せた最後の技、あれは・・・」

「たしか西条殿の故郷日本の剣術の一つ『居合い』と言うものだった気がしますが」

「日本のサムライの技ですか？」

「詳しくは知りませんが日本特有の反りのある片刃の剣である刀を鞘に入れ鞘内で疾らせ抜き放つことによって剣速を二倍、三倍に加速させ相手に攻撃の間を与えずに切り伏せる一撃必殺の技だと聞いたことがあります」

「つまり西条殿は自身の手鞘に見立ててその居合いを行っただけのことですか？」

「そう言うことでしょう」

「そのことから考えて西条殿はあの権能で切る切らないを選択出来る、つまりあの権能を完全に掌握していると考えて良いですね」

「あの居合いと言う技の関しても聞いた話によれば居合いで最も大事なものは剣の間合い何だと言います、自身の間合いを完全に把握した達人は相手が自身の間合いに入った瞬間には既に剣を抜き終えて相手を斬り捨てているらしいですよ」

「そして、西条殿の剣はその間合いを自由に操ることが出来る」

「うむ、防ごうとして剣を盾にしたとしても、剣に当たる瞬間に剣の間合いを短くし抜けた後に刀身を伸ばせば剣は身体に届いてしましますしな、そしてその伸縮の速さもまた光速」

「あの権能に居合い、これほど恐ろしい組み合わせはありませんな」

「ええ、さらに今回の決闘で分かりましたが西条殿はかなりの武術の才能がおりそうですね、それに彼はまだテュポンの権能もあります」

「サルバトーレ卿も彼のことをいたく気に入っておられたようですね」

「権能についても既にテュポーンとフェルグスの権能の他二つの権能を所持していてサルバトーレ卿と同じく全部で4つの権能を所持していると言う話です」

「彼と懇意にしておくことは我々にとつてはプラスでしような」

「人となりの方も大変な人格者のようですね」

「あまり声高には言えませんが、彼と言う王を選ぶ選択肢が増えればバルカンの魔王を頼らずとも済みますしな」

「そのバルカンの魔王ヴオバン侯爵と引き分けたと言う話も聞きま
すし実力は十分でしょう」

『雌狼』の総帥のその言葉に他の二人の結社の長も頷く

「それにしてもまさか王同士の決闘をこの目で見る事が出来るとは
思いませんでしたよ、これは姪に良い土産話ができます」

「たしかに、不謹慎かもしれませんが王同士の戦いなどそう観れる
ものではありませんからな」

「これがヴオバン侯爵等なら大変なことになりますが、西条殿はそ
の辺りのことを考えてくださっている様子」

「ええ喜ばしいことに彼はアメリカのジョン・プルート・スミス氏
の様に我ら民草に優しい王であるようですね」

「そう言えば先程言っていたブランドゥリ殿の姪っ子さんは西条殿
と余り歳は変わりませんでしたね」

「ええ、家の姪の方が一つ年下な筈」

そんな世間話をしながら三人は闘技場を後にしたのだった

第十一章 邂逅と決闘と評価と（後書き）

三毛猫ヤマトです

やっと投稿することができました

新学期に入って履歴書や志願理由書などを書いていたらこんなにな
ってしまいました

スミマセンm(――)m

内容についてですが、サルバトーレとの決闘の描写がないのはまだ
原作でサルバトーレの張とした戦闘が無いので彼がドコまでのこと
が出来るのか分からない為なのでその辺りのことはスルーして貰え
ると幸いです

これからも期間が空くと思われませんがどうぞよろしくお願いします

m(――)m

第十二章 噂と日常と大切さと（前書き）

また更新が遅れてしまいすみません（――）m

第十二章 噂と日常と大切さと

新しい新年を迎え神社にとっては表向き最も参拝客が訪れ忙しいと言える時期を過ぎた七雄神社の社務所で二人の人物が会話をしていた、一人はこの神社に所属する媛巫女、万里谷裕理、もう一人は正史編纂委員会所属の甘粕冬馬である

二人はつい先日祐理がドイツへとお供した日本最初の王、西条将征との旅行の内容について話をしていた

「そうですが・・・ではあちら、ヨーロッパの方で立っている噂は事実というわけですね？」

「はい、本当です。将征さんは正式にドイツの魔術結社の盟主になられました」

祐理のその言葉に甘粕は重い溜め息を吐きながら呟く

「そうですか、これは本格的に動かなければならなくなってきましたね」

「・・・甘粕さん、正史編纂委員会は将征さんにどのような対応をとろうと考えているのですか？」

祐理は甘粕の言葉に対してその真意を問う

「・・・ぶっちゃけて言えばですね、私たちは西条将征氏と敵対関係になりたくありません。まだ『王』となって日が浅いとは言えますが、その持っている力は他の『王』の方々と比べても勝るとも劣りません、この先どれ程の存在になるのか想像もつきませんしね。できれば、十分に親密な関係を保ちつつも、彼の行く末　この先どのような魔王に育つか見極めがつくまで、最終的な関係の構築を保留したい。なんてそんな虫のいいことを我々は目論んでいたのです・・・」

甘粕はそこで言葉に一息を入れた、だが彼の顔にはまさに疲れつと言える様な表情がありありと浮かんでいた

「彼は余りにも強すぎました、彼は王となってまだ二年にもなつて

いないと言つのに既に彼が殺めた神、手に入れた権能の数は四つ、その中には我々でも知っているようなビッケネーム、『まつろわぬ神』の神の中でも上位、最上位クラスとも呼べる様な存在もいます。・・・はつきり言つて彼は余りにも異常と言える速度で成長しています。他の魔王の方々でもこんな短期間にこれ程の数と質の神を殺めたと言つのは前例がありません」

甘粕は祐理に対して呟く様に言う

「そして極めつけは彼はドイツの魔術結社の盟主になってしまったことです、これでは我々も見極めるとか悠長なことは言っていられません。我々も速急に動かねば」

「・・・つまり正史編纂委員会、ひいては日本も将征さんの傘下に入ると言つことですか？」

「恐らく、いえ十中八九そうなるでしょね、せつかくの生まれた日本初の魔王の庇護を受けないなんてもつたいたないですからね、王さまとしての実力は疑うべくもなく、祐理さんの話や調査の結果から見てもかなり人格者の様ですしね」

つと甘粕は諦感したかのように言う

「そう・・・ですね、将征さんならそう言つたところは問題ありませんし」

そう甘粕に祐理は返す

「そうですか、それじゃあ私はそろそろ失礼させて頂きますね、委員会への報告もありますので」

「はい、それでは」

「ええ、それと頼みましたよ祐理さん、今現在、日本で西条氏の御寵愛を受けているのは貴女だけなんですから」

「ご、御寵愛!？」

「ええ今、西条氏の側近の中で日本勢なのは貴女だけ、さらにその側近の中でも本職の巫女も貴女だけなんですから自身を持って!」
甘粕の言葉に祐理はそれこそ湯気が出てしまうのではと言つほどに顔を真っ赤にしてしまう

「わ、私がま、将征さんのごっ、ご、御寵愛を〇×

」

完全にフリーズ

「あ、あのゆ、祐理さん？」

それから祐理が再起動するまでに暫くかかったそうな

新学期が始まり学院内も何時もの賑やかさを取り戻しつつある日々の中のお昼休み、将征は自身のクラスで例によって昼食をとっていた、しかしそこでは半ば日常化してしまった風景に新しい色彩が混じっていた

将征が既に習慣化してしまったセフィリアが作ったお弁当を食べている、その周辺では将征たちの様子をうかがおうと耳を立て視線を向けていた

そして理由は新学期が始まってから毎日お昼休みになると教室にやって来る祐理にあった

本来ならいまだ中学生の祐理が高等学校の校舎の教室に居るのはおかしいのだが、ここ私立城南学院は高等部と中等部が同じ敷地内にあるのでできる離れ業である

そして現在、将征の机を囲むようにしてセフィリアと祐理が席に着いて昼食をとっているのだ

来た初日はかなりの騒ぎになりやれ「遂に正妻と側室の対決だ」や、やれ「愛妻弁当を持ち寄り始めた」や遂には「俺はセフィリアさんに賭ける」「いや俺は万里谷に」など何を基準にしているのか分からない賭けを始める始末である

だが比較的同じクラスの者たちは「ツウかドツチが正妻なんだ？」

「万里谷の方じゃないか？日本人だし」「二人は幼なじみってこと？」「いや西条に二期の頃から愛妻弁当を作って来ているセフィリアさんの方が正妻だろう」「そう言えばセフィリアさんある流派

の武術の使い手で強いらしいぜ」「西条の家、結構有名な古流武術の道場らしいからな」「親同士が決めた許嫁ってことか?」「武術の流派同士の子供の結婚」「その関係でコッチに嫁いできたとか?」「そして結婚が決まった西条くんの所へ幼い頃から想いを寄せていた万里谷ちゃんか」等と事実無根の話に尾ひれをつけてながらも暖かい目で見守っているのだが、しかし外の廊下などでは

「遂には愛妻弁当まで・・・ツク」「人数を集める西条を襲撃するぞ」「やめろ、幾ら人数を集めたってあの武神が相手じゃ返り討ちにあうつて」「ならやられないだけの人数を集めるまで」「そんなことしたら周りが黙って無いって」「まず空手、剣道、柔道とかの格闘技系の部活は全部敵に回るな」「元々弱小だったウチの格闘技系の部活が全国の常連にまでなったのは西条が指導したからって話だしな」「今じゃそれを訊いて全国から格闘技経験者が入学を希望しているらしいし」「その殆どが西条のファンだって聞いたぞ」「今じゃウチの学院、格闘技の名門だからな」「柔道部の道場には嘉納治五郎の写真の横に西条の写真が額縁に入れられて飾ってあるらしいぞ」「中部部じゃ応援の垂れ幕と一緒に毎回大会に持って行くらしいし」「もしかしてこの前、中部部の空手部の顧問が言ってた『垂れ幕は忘れても写真は忘れるな』って西条の写真のことか」「現人神?」「もうある意味崇拜の域に達してるな」「格闘技系の部活を全部全国区にまでしたんだからもう武術の神様みたいなもんだろ」「案外、武神って通り名の由来ってそれなんじゃ?」「兄貴が襲撃される何て聞いたらきつと弟も出てくるぞ」「その弟の方もこの間の春の大会で全国準優勝、秋の新人戦で全国制覇したらしいし」「勝ち目はないな」「ツク(泣)」「ニヤー」

なんて会話がなされ反西条連合が結成されようとしたが五分で消滅し、さらには日々将征に対する嫉妬や妬みの視線が減っているとかいないとかシロネコが鳴いたと鳴かないとか
そして件の将征たちはそんな周りの喧騒も知らずに三人で穏やかに

昼食を食べていたのだった

「平和だなあ」

放課後、将征たちは三人で学院の帰り道を歩いていた

「そうですね」

将征の呟きに笑みを浮かべながらセフィリアが応える

「なにか特別なことがあるわけでもない普通の日常、戦いって言うものを経験するとその大切さが見に染みてわかりますね」

「……」 『自分のいる山の高さは下からじゃないと分からない』 だったかな？

「……」

突然の将征の呟きに疑問符を挙げる二人

「幸福ってモノはそうじゃなくなっただけで初めて大切さがわかるんだって昔、じいさんが言ってたけどこう言うことのことか……」

「確かに山の高さ（幸福）はソコに居続ける者にはわかりませんね、その高さに（幸福で）いることが当たり前ですから」

その将征の言葉にセフィリアが応える

「私もお二人の言う通りだと思います、けれど私は今の自分の環境を不幸だなんて思いませんよ、確かに『まつろわぬ神』のことはありますが、将征さんやセフィリアさん、ナイザーさん、ジェノスさんと知り合って、『まつろわぬ神』に挑んで、そして無事日常に戻って来れました。」

祐理は二人に語りかける

「そして将征さんはその平和な日常を守りたいのですよね？なら私は将征さんのそれをお手伝い致します。私はそれがとても貴いモノだと思いますから」

祐理はその顔に笑みを浮かべながら二人に自分の思いを吐露する

「フッフフそうですね、私も同じですよ将征、私も貴方のあの誓いがとても貴いモノだと思います。他の王にはないその考えが、だか

「私は貴方に忠誠を誓ったのですからね」

セフィリアもまた微笑みを浮かべて将征に語りかける

「・・・フツありがとう二人共、コレからも幾つも危険があると思うが手伝ってくれるか？」

「はい！」

第十二章 噂と日常と大切さと（後書き）

三毛猫ヤマトです

またしても更新が遅れてしまいました

出来るだけ頑張っではいるのですが、課題や面接の練習やらなんやらでどうしても平日には書けずこんなにも間が空いてしまいました。

内容もあまり進んでおらず誤字脱字もあると思いますがどうか暖かい目で見てくださいと幸いです

次回辺りで草薙の巫女が登場すると思いますので宜しくお願いします

m ((m

第十三章 媛巫女と今後と道場の悲鳴と

祐理が甘粕への噂の説明を行ってから三週間、学院の三学期が始まってから一週間近くが足った週末のある日、七雄神社の祐理の元へ珍しい客が訪れていた

「……恵那さん？どうなさったのですか？」

「や、祐理、ひさしぶり。今日は、ちょっと挨拶しところかなって思ってたさ」

そう言って清秋院恵那が、にへらと笑いかけてきた

美しい長めの黒髪に端正な顔立ちながら親しみやすい雰囲気の少女だがこの少女こそが当代随一の媛巫女と呼ばれる日本でも最高の資質を持つ者なのだ

服装はどこかの高校の制服のようで、白いシャツにベージュ色のベスト、スカートを身に付けている

そして彼女の横に置かれ細長い布袋

それを見た瞬間に祐理の心臓はドキリと高鳴った。呪力を遮断する特殊な織布で編んだ布袋、それに包まれているにも係わらず感じ取れてしまう凄まじい神力

いくら遮断したとしても祐理の靈感にはあの神刀の気配を感じ取れてしまうのだ

「祐理ってさ、うわさに聞く王様の側近の家来になっただんではない？」

「将征さんのですか？ええまあ、側近と言えるかは分かりませんがお側にお仕えさせて頂いています、どうか成されたのですか？」

「いや、実はさ今度、恵那も王様の家来に成ることに成っただんよ。我が清秋院家の当主がぜひにと申し出て、それをおじいちゃまが面白がって推挙しちゃったんだよ。ほら知ってるでしょ、おじいちゃま？だから委員会の人も文句を言えないってわけ」

「お、おじい あの御老公が、ですか？」

正史編纂委員会ですら顔色をうかがう、古老たちのひとり。

媛巫女のなかでも清秋院恵那を特に見込んで、秘伝の神刀を授けたという

「そう、だから今日は、これから同じ王様に仕える家来同士よろしくって言う挨拶」

それを聞いて祐理は

「この時期に恵那さんが将征さんにお仕えすることになったと言うことは正史編纂委員会は正式に将征さんの傘下に入ることを決めたと言うことですか？」

「うん、そうみたいだよ。そもそも委員会の人たちは動くのが遅すぎると思うんだよね。モタモタしてるからせつかく日本に生まれた王様を外国なんかに取りられちゃうんだよ」

「それについてはドイツの方に連絡はしたのですか？」

「うん、一応正式にはアッチの王様だからね、その辺は一応断りを入れておかないといけないみたいでね」

実はつい先日、将征が正式にドイツの魔術結社の盟主になったことが世界的に公表され、これにより将征は世界的にはドイツの魔王と言うことになっているのだ

この状況で将征の傘下に入り自国の王となって貰うとなると、ドイツの魔術結社たちにその旨を伝えなければならぬのだ

「それに最初は外国から来てる側近を倒して追い出せって言われてただけだよ、アッチが王様のことを公表しちゃったからアッチから来てる魔術結社の子が正式な王様の側近になっちゃったんだよね。これで手を出せば国同士の戦争にまでなるって言うんだもん。まったく」

そう将征がドイツの王だと正式に公表された今、将征の側にドイツの魔術師、騎士が居るのは自然なことである

自国の王の側に仕えている彼らを追い出そうものならそれは国に対する宣戦布告ともとれることだ

ならば王が居なくなれば彼らは居なくなるとも言えるのだが、それでは本末転倒であり、それ以前に王に対して「貴方は外国の王だから

ら出ていけ」なんてことを言えるはずもないのだ

「ところで、王様ってどんな人？噂じゃかなり出来た人だって聞いたんだけど」

「え、ええ少なくとも私の知る王の中では一番の人物です」

「へえゝあの祐理がべた褒めだなんてこれは想像以上かも、そうすると恵那のことも普通に受け入れてくれそうだね」

「ええ将征さんなら恵那さんに対して何か酷いことをしたり何てことは絶対にしませんよ」

「うわあゝ本当にべた褒めだね、もしかして祐理、王様に惚れちゃったとか？」

「ノノな、何を、変な言いがかりはやめてください」

「ふふふ。真っ赤になって否定して、本当に可愛いなあ、でもそれなら一緒に頑張ろうね祐理」

「？何を一緒に頑張るのですか？」

「実はさあゝ実家の当主のおばあちゃんにあわよくば王様の女になつて王様の御寵愛を手に入れろって言われてるんだよね」

ハハハッハッと笑いながらそんなことを言う恵那

「お、女！？」

「そ、だから祐理も一緒に王様の御寵愛を貰えるように頑張ろ、大丈夫、王様の女に成った時は最初のは祐理に譲るから」

「ノノな、ななな何を」

「ハハハハ本当に可愛いなあ、んじゃ休み明けにね」

そう言いながら恵那は脇に置いておいた布袋に包まれた神刀を手にしち上がり今だ暴走状態の祐理に笑いかけながら神社を後にした

恵那と祐理がそんなことをしていた週末の休日の昼下がり、西条家の中にある道場では、西条兄弟が日々の鍛練を行っていた

弟の昶^{あきゆき}は手に木刀を持って一心不乱に素振りをし、兄の将征は祈

りように手を会わせその後足を肩幅に開き構えて突くという動作を繰り返して正拳突きを行っている

「ふう〜そろそろ休憩を入れる？」

「ん？あ、ああそうだな」

晁倅の呼び掛けに黙々と感謝の正拳突きを行っていた将征は応える

「はい、どうぞ」

「ああ、ありがとうセフィリア」

「ありがとうございます！セフィリアさん」

休憩に入ると道場の端の方で二人の鍛練を見ていたセフィリアが二人にタオルとスポーツドリンクを渡す

「にしても、旦那の実力は知ってましたけど弟くんも中々のものじゃないすか」

「本当すか！？」

端の方でセフィリアと一緒に見ていたジェノスが言った言葉に反応する晁倅

実は、ジェノスは将征が正式にドイツの盟主になったと言うことで将征に、ではなく将征の家族に対しての護衛としてセフィリアと共にコチラにとどまることになったのだ

と言っても西条家の者は皆が、武道の達人で、ほとんど護衛なんてモノは必要ないのだ

何しろ祖父の勇一郎は代々西条家が受け継いできた柴さい壊かい流という古流武術の達人で未だに権能を押さえた状態とは言えの全国制覇の経験も持つ将征を軽く捻ひねってしまふほどの実力の持ち主で、母惠璃に至っては渋川流合気柔術の使い手で、今までお約束の中でしか使えなかった柔術の奥義《合気》を実戦の場で使用した近代武術界の歴史上三人目、さらに女性では最初とされる文字通り天才なのである

「まあ、確かに最近、動きが前よりも格段に良くなってきてるな」

「ええ剣もまっすぐで型の方も私が来たときより綺麗になってきたと思います」

「そりゃあ、将にいやセフィリアさんの指導のお陰だよ、二人に悪

いところとかを徹底的に直させられたからな」

その言葉に笑みを持って返す二人

実はセフィリアが初めて西条家を訪れた後もセフィリアは度々西条家を訪れて、将征と一緒に鍛練をしており、その際に弟の晁倅の指導を行っている将征と一緒に晁倅の指導も行っていたのだ

「だけど間違えるたびに竹刀や拳が飛んできて、構える前から問答無用で切りかかってくるっておかしいだろ、ふつつ」

「それのお陰で強くなってきたのも事実だろうが」

「そりゃ〜あれだけ容赦なしに攻撃されつづければイヤでも強くなるわ、お陰さまで防御はもう全国大会でも抜かれる気がしねえよ」

「それはなによりだ」

「全然悪いと思ってねえ〜よこの人」

「それよりセフィリア、久しぶりに模擬戦でもやらないか？」

「ええ良いですよ」

そう言うのと立ち上がりセフィリアは晁倅の持っていた道場の木刀を手に将征の前に立ち構える

将征も壁に掛かっていた木刀を手に取りセフィリアに向けて構える
晁倅とジェノスはそれを見て端の方へ避難する

将征は木刀を正眼に構えセフィリアは右手に木刀を持ち自然体で立つ、無行の位に構える

「フツ！」

最初に仕掛けたのは将征であった

一気に踏み込みセフィリアの前まで移動しセフィリアの左肩、将征から見て右の肩への袈裟斬りを放つ、が降り下ろしたときすでにそこにはセフィリアの姿はなく

セフィリアは将征が袈裟斬りを放ったことで無防備になった将征の右側に移動し右薙ぎを放つ、それを将征は間一髪のところまで横つ飛びに避けるがそれにセフィリアも合わせて飛び将征に対して木刀を放っていく

それを木刀を使い弾き、剃らしていくが手数が多すぎるため捌きき

れず将征は後ろに後退するばかりになってしまふ。がセフィリアの振るう木刀とかち合ったところに力を入れて弾きセフィリアとの距離を空けることに成功する

「流石ですね、今の攻撃を防ぎきりますか」

「こっちはそれだけで一杯一杯だけだな」

「ご謙遜を、あのサルバトーレ卿と互角に戦ったのです、あの方の剣に比べれば私の剣などどうってことはないでしょう？」

「いやセフィリアの方が厄介だよ、セフィリアの方がサルバトーレよりもズツと速いからな」

「でも幾ら私の剣が速くても貴方には視えているんでしょ？」

そうそれが将征がクロノスの騎士であるセフィリアや《剣の王》サルバトーレ・ド二と剣で互角に戦えた理由である

将征は物心つく前から祖父や両親の武術を見ていた、そしてその祖父らが使うのは古流武術と合気柔術、古流武術独特の自身の身体の運び方と逆に相手の身体の運びを利用して関節技、合気柔術の相手の力を利用して合気、幼少の頃からそれらの完成形とも呼べるモノを間近で見ていたためか将征には相手の姿勢などから重心や力の加えられている箇所が解るのだ、そして今ではソコから次にどの様に動こうとしているかまでも読み取ることが出来るまでになった

未だ速さや技術などの多くの点でセフィリアやサルバトーレに劣る将征が二人と互角に戦うことが出来たのは一重にこのたぐいまれな洞察眼によるところが大きい

「幾ら視えるって言ってもお前の速さは異常すぎるっての」

「ソッチこそふつつならは視えもしない筈なんですけどね」

そんな言葉を交わしながら二人は再び互いに構え向き合い刃をまじえる

将征が木刀を降り下ろせばセフィリアがそれを避けカウンター気味に木刀を振るい

セフィリアが常人には捉えることのできない速さで攻めれば、将征はその動きを先読みし、待ち構えるつと言ったように互いに後一步

のところまで攻め立てるが有効打にはいたらないという状況が続いた

「なあ、ジエノスさん」

「なんだい？あつくくん」

「あの二人、スゴく楽しそう他よな？」

「楽しそうだな」

「あの二人の動き、特にセフィリアさんの方、残像を引いてるんだけど」

「引いてるなあ」

「しかもたまに、消えてる様に見えるんだけど」

「そう見えるなあ」

「あの二人の木刀を降ったときの風、特に将にいの方、降り下ろした後風が直線上にある壁に当たってる音がするんだけど」「してるなあゝ」

「あの二人が床を踏みしめて加速する度に床が悲鳴をあげてるんだけど」

「あげてるなあ」

「あの二人回りのこと忘れてもいいのか？」

「忘れてるなあゝ絶対」

「……」止めてくれよアレ、あの二人のドツチかが倒れる前に道場の方が先に倒れるぞ、絶対！」

「ハハハ、うん無理（^|^）」

そして戦いは道場ね悲鳴を聞いてやつて来た惠璃によつて鎮圧され、二人とも正座をしながら惠璃から有り難い説教を貰つたとか

第十三章 媛巫女と今後と道場の悲鳴と（後書き）

三毛猫ヤマトです

突然ですがアンケートを採らせて貰います

近々、黒猫の変身能力持ちの金髪少女を出そうと思うのですが能力的にも名前的にも神様側のキャラなのでどうやって主人公側にするか考えた結果、皆様にアンケートをとって皆様の意見を聞こうと言う結論に達しましたのでどうかよろしくお願い致します

- 1・神と人間とのハーフ
- 2・錬金術にまつわる神具で造られたホムンクルス
- 3・原作どおりのナノマシンを体内に宿したクローン体
- 4・その他

お手数ですがこの中から投票をお願い致します

期日は9月17日（金）までですのでよろしくお願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0407n/>

極東の天災の魔王

2010年10月13日02時16分発行